

2013 年度卒業論文

高校球児らしさの形成について
—虚構と現実を彷徨う若者たち—

北海道教育大学教育学部旭川校

教員養成課程 社会科教育専攻 社会学ゼミ

学生番号 0304

内山 孝太

目次

はじめに	1
------	---

第1章 高校野球の形成

1-1	ベースボールから野球へ	2
1-1-1	「一高野球精神」＝武士道精神	3
1-1-2	学生野球への批判	4
1-2	高校野球のはじまり	5
1-3	全国高等学校野球連盟の発足	5
1-4	日本学生野球憲章が示す高校野球	7
1-4-1	前文	7
1-4-2	総則	7
1-4-3	学校教育の一環としての野球部活動	8
1-4-4	学生野球資格と他の野球団体などとの関係	9
1-4-5	学生野球にかかわる寄附または援助	9
1-4-6	注意・厳重注意および処分	10
1-5	高校野球の実態	10
1-6	小括	11
補論	学習指導要領と部活動	11

第2章 高校野球の行動様式

2-1	入場行進	13
2-1-1	高校野球の儀式性	13
2-2	選手宣誓	14
2-2-1	選手宣誓のメッセージ性	14
2-2-2	高校生らしさのキーワード	15
2-2-2-1	仲間	16
2-2-2-2	感謝	17
2-2-2-3	全力	17
2-2-2-4	勇気	18
2-2-2-5	全身全霊	18
2-3	ヘッドスライディング	18
2-4	ガッツポーズ	19
2-4-1	「バーン」ポーズ	19
2-5	伝令	20

2-6	不祥事（逸脱行為）	20
2-6-1	体罰	22
2-7	小括	25
第3章 高校球児を演じる高校生		
3-1	学校からの期待	27
3-1-1	全校応援の意義	27
3-1-2	特別な高校野球期間	28
3-2	指導者からの期待	28
3-3	地域からの期待	29
3-3-1	高校野球の地域貢献	30
3-4	親からの期待	31
3-4-1	「御恩と奉公」の関係	31
3-5	小括	32
第4章 高校球児のおしゃれ		
4-1	坊主	33
4-1-1	坊主は強制なのか	34
4-1-2	坊主とプレーの関係性	35
4-2	眉剃り	36
4-2-1	眉剃りとプレーの関係性	37
4-3	高校野球用具	37
4-3-1	野球用具へのこだわり	38
4-3-2	規制の中でのおしゃれ	39
4-4	高校野球の美意識	40
4-4-1	統一性の美	41
4-4-2	負け方の美	41
4-5	小括	42
第5章 まとめ		
5-1	総括	43
おわりに		45
謝辞		45
参考文献・参照ホームページ		46

はじめに

大衆スポーツとして定着している野球の歴史は長く、その中で学生野球も時代と共に変化しながら発展を続けてきた。特に高校野球においては、依然として暗黙の了解として現代にも受けて継がれている慣習も多く残る。それも、およそ 100 年という長い歴史の中で朝日新聞社と全国高等学校野球連盟によって「高校球児」という国民的英雄を創り出してしまった遺産と言えるだろう。

現代では、マスメディアによって物語が生成され、強化されている。特に、ABC・テレビ朝日系列「熱闘甲子園」では、試合のダイジェストだけではなく、高校球児のプライベートな部分まで取り上げてストーリー化している。野球の知らない人が見ても共感するような内容になっており、その完成度は非常に高い。そのような積み重ねによって国民は、「高校球児」を理想の若者像のように捉え、頭の中に刷り込まれ、美化されていくのである。

私自身、高校球児として疑問を抱くことなく、当然のこととして 3 年間を過ごしてきたわけだが、大学生となり、高校時代を振り返ると常に、「高校球児としての自分」が居た。高校球児らしい行動をとることを求められていると感じ、常に自問自答しながら高校球児に相応しい行動を選択していた。そんな過去の自分に問いかけるように「高校球児らしさ」とは何か、という疑問が本論文のスタートである。

本論文では、様々な視点から「高校球児らしさ」を明らかにし、高校球児への聞き取り調査や私自身の経験をもとに、高校球児に求められているもの、高校球児の役割などについて考察していく。

第 1 章では、高校野球の成立過程を追っていく中でどのような精神が大切にされてきたのか、また、日本高等学校野球連盟が求める高校野球観とはどのようなものなのか、日本学生野球憲章をもとに明らかにする。

第 2 章では、高校野球の行動様式に着目し、長い歴史の中で高校球児が行ってきた行動が「高校球児らしさ」の形成にどのような影響を与えているのか、また高校球児の行動が社会とどのような関係があるのか明らかにしていく。

第 3 章では、聞き取り調査をもとに高校球児がどのような役割を期待され、その期待に応えるためにどのような行動をとっているのかについて考察し、「高校球児らしさ」について明らかにする。

第 4 章では、高校野球についての美意識や高校球児のおしゃれについて考察する。日本高等学校野球連盟やチーム内での多くの規制がある中でも、おしゃれ楽しみ、道具へのこだわりを見せているのか考察する。

第1章 高校野球の形成

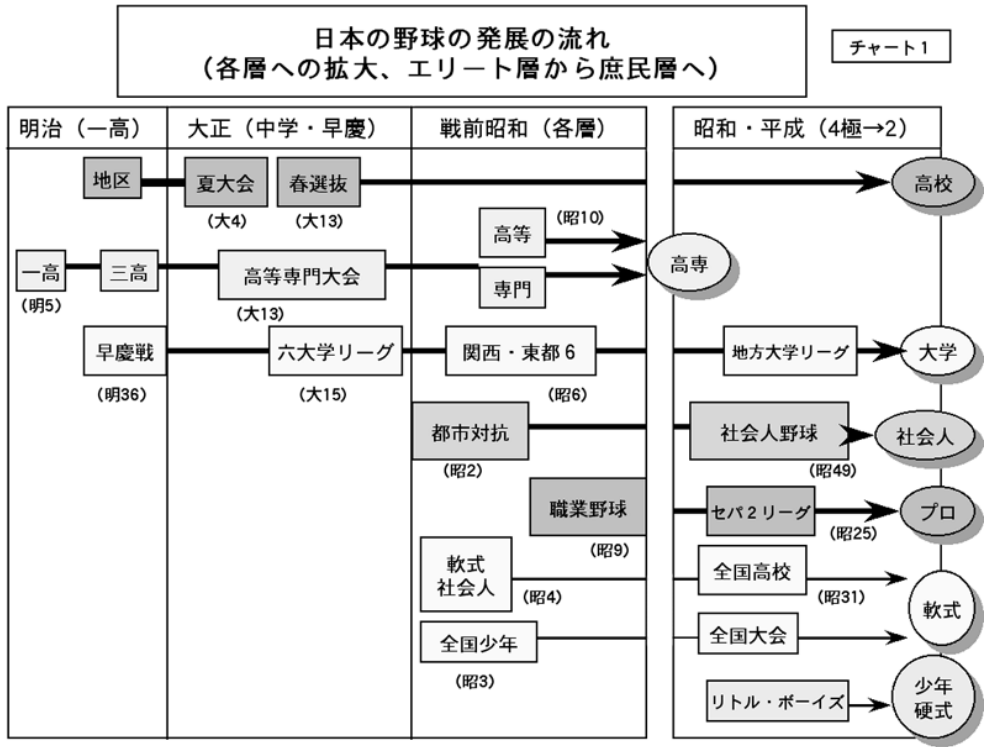
1-1 ベースボールから野球へ

野球の伝来には諸説ある。その中でも有力な説として考えられているのが、1872年にアメリカ人のホーレス・ウィルソンによって第一大学区第一番中学（現東京大学）の生徒にベースボールを紹介したことが始まりと言われている。これまで、若者の間では、スポーツに値するものが無く、体を動かすものといえば武道くらいであった。ベースボールは人気スポーツとして全国に広まっていくのだが、武道同様に武士道精神を重んじながら行う精神主義のスポーツとなった。これは、まさしくベースボールではなく野球という新たなスポーツの始まりである。

その後、第一大学区第一番中学は第一高等中学校に改称し、学生野球の覇権を握っていく。1890年から1904年まで続いた第一高等中学校の不敗神話は早稲田大学、慶応大学の台頭によって終わっていったが、「一高野球精神」は全国の中等学校を中心に広まり、受け継がれたことで、今後の学生野球に大きな影響を及ぼすことになる。

日本の野球は図 1-1 に示したように発達していく。学生野球が日本野球の根源として現在に至り、大衆スポーツとして年齢を問わず行われるようになったのは、「一高野球精神」が日本人に受け入れられてきたためである。

図 1-1 日本野球の発達の流れ



出所：日本の学生野球の今昔

1-1-1 「一高野球の精神」＝武士道精神

第一高等中学校（1894 年、第一高等学校に改称）は、1 年間の試合数が極端に少なかった。それ以外の日は練習に明け暮れ、この一高式練習は伝説として伝えられていく。一高式練習は精神的・肉体的な鍛錬のための練習であって妥協の一切許されない環境で行われていた。雨の日も雪の日も素手に素足で練習が行われ、痛みがあっても、どんなに辛くても関係なく実施されており、いつしか一高式練習が一高の象徴となる。当時は、「痛い」という言葉を遣わずに「痒い」という言葉を遣うよう言われていたことも驚きである。つまり、「一高野球精神」とは、勝利至上主義や鍛錬主義といってもよい。

第一高等学校が横浜外人チームと国際試合を行い 29 対 4 で大勝したことで、日本人のナショナリズムは高まりをみせ、武士道精神の延長線上に野球の精神が位置づけられるようになった。一高野球部の中心には常に、礼の精神、体を張る武士的要素、恥を知る精神などの武士道精神があった。

それでは、なぜ一高式練習は鍛錬主義を行っていたのだろうか。それは、彼らがエリート集団であったことが挙げられる。第一高等学校は、現在の東京大学あたり、学生一人ひとりが次世代の国家を担う人材になるという使命感を持っており、周りもそれを期待していたためである。そのため、野球をエリートに必要な「精神修養」の手段として用いていたのである。

「一高野球精神」は、現代の学生野球にも通じる部分が多くあると感じる。今日においても甲子園に出場するために体を鍛え、技を磨き、社会に出ても通用する人物になるために忍耐力を付け、礼儀を学ぶ。

現在の学生野球の基盤ともいえるべき一高野球の特徴は以下の 4 点にまとめられる。（清水,1998:134）

- (1) 寄宿舎や校友会を基盤として、「全校の団結と文武に渡る諸武芸を錬磨」する身体文化の一つとして、野球を全校挙げて応援し、熱狂すること。
- (2) 試合は「鬱勃たる胸中一片の気を、球に託して外に表示するの具となれり」といわれたように元気な精神たる校風発揚の場であり、母校の名誉を賭けて必ずや勝利すべきものであること。
- (3) 試合をすることよりも、「一高式練習」といわれる日々の猛烈なる練習による精神修養と鍛錬主義が重視されること。

図 1-2 第一高等学校 vs 横浜外人の勝負表

勝 負 表 (Table)													明治 29 年 6 月 5 日	
第一高等学校 対 横浜外人													本場東京明治 明治 29 年 7 月 18 日 明治	
2 回戦													ベースボール場 による	
Start	Player	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	Sun	Start	Player
SS	井 原	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	3	3B	Fillis
3B	村 田	×	×	○	×	○	×	×	○	×	○	3	LF	Chipman
1B	宮 口	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	4	CF	Abel
LF	富 永	○	×	×	×	○	×	○	×	○	×	5	C	Golden
P	青 井	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	3	2B	Douglas
C	藤 野	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	2	P	Collen
2B	井 上	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	4	RF	Wittny
RF	上 村	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	5	SS	Tilden
CF	森 脇	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	3	1B	Casery
Total		3	3	2	2	2	7	4	2	7	32		Total	
		0	0	0	0	3	10	14						

出所：第一高等学校 HP

- (4) 野球には、「武士道精神」と当時の野球部員と関係者が表現する質素儉約、剛健勇武、直往邁進の特質があり、これを実践するにも礼の精神、体を張ること、恥を知る精神を重視すること。

1-1-2 学生野球への批判

学生野球の人気は加熱の一途をたどり、それに伴って学生野球に対する批判も出てくるようになった。この時、初めて学生野球の在り方が問われた時期でもあった。

東京朝日新聞社（現朝日新聞社）が野球害毒キャンペーンとして 22 回にわたって著名な教育者の意見を掲載した「野球と其害毒」は野球人気に影響を与えた。その中で、1911 年 8 月 29 日に第 1 回目として掲載された、当時、第一高等学校校長であった新渡戸稲造は学生たちの学業の妨げになると懸念して、「野球害毒論」を発表した。「野球は巾着切の遊戯、と新渡戸校長」という見出しで談話の内容が記されている。「野球という遊戯は悪く云えば巾着切りの遊戯、對手をペテンに掛けよう、計略に陥れよう、塁を盗まうなど、眼を四方八方に配り神経を鋭くしてやる遊びである、故に米人には適するが英人や独逸人には決して出来ない、……（中略）……野球選手の不法法、是はホンの一例に過ぎぬが何處の學校の野球選手でも剣道柔道の選手のように試合をする時に禮を盡さぬ、然らば米人が野球をする時にもそんなに禮が無いのかと云へば決してそうではなくスポーツマンライクと云つて非常に禮儀正しいものである日本語に譯して「運動家らしい」と云ば何だか禮儀も知らぬ破落漢の様に聞えるのも日本の運動家の品性下劣から來て居る……日本に於ても野球の試合に何等かの制限を附する必要がある此處に最も憂ふべきことは私立は勿論の事官立公立の學校と雖も選手の試験に手加減をすることもあり得ることである……（中略）……沢山の父兄の懇請、私は幾人か數を忘れた位沢山の父兄から其子弟に野球を止める様に忠告して下さい親兄弟では云ふ事を容きませぬから、と頼まれた云々……（省略）」（内川、松島,1986:771）。

「野球害毒論」における新渡戸の主旨は 4 点である。

- ①野球は相手を騙したり塁を盗む、いやらしいスポーツであり、強い気持ちや氣迫のないスポーツである。
- ②日本の野球選手は剣道や柔道の選手と違い、試合をするときに礼もせず、品性に欠ける。
- ③私立だけではなく国公立の學校においても、野球部員の試験に対して特別措置をとる教員が現れる可能性がある。
- ④保護者が野球を辞めさせたがっている事例が多くある。

それに対して野球擁護派も激しく反発する。その代表的な一人として、押川春浪がいる。押川の父は武士の血を引きながらクリスチャンとして仙台神學校（現東北學院）を設立した人物の一人であり、押川はその父の影響を受け、学生野球について「世界に比無き日本武士道は、一面に於いては精神修養の産物也、一面に於いては練武鍛勇の産物也。實に練

武鍛勇の業は、當世の黄金崇拜者の目には、如何とも馬鹿らしく見ゆるならんも、武を練って而して體力を鍛え、體力を鍛え而して精神を修養す、之れに智力を加へば、天下又た何者をか恐れん、日本武士道の由來する處茲に在り。徒らに練武鍛勇の業を嗤ふは、日本武士道の由來を嗤ふ所似と知らずや」(橋戸,1905:6)と語っている。

押川は野球を通して「日本武士道」である精神修養と練武鍛勇の心を育てていくことが重要だと考えていることがわかる。

1-2 高校野球のはじまり

「野球と其害毒」が出された4年後の1915年に大阪朝日新聞社が中心となり全国中等学校優勝野球大会が開催された。元来、野球害毒論を唱えていた朝日新聞社であったが、野球害毒キャンペーンの影響によって朝日新聞の購買数が減少し、その対策を考えるための検討会議において、衰えない野球熱を利用してはどうだろうかという案が出た。こうして全国中等学校優勝野球大会を開催することになったが、朝日新聞社は野球害毒論を全面的に覆したわけではなかった。大会開催にあたり大会の目的を「…本社はこの大会によって全国的に統一ある野球技の発達普及を計ると共に、技よりも寧ろ精神を主として進むべき学生野球の真価を発揮せしめんと企てたのである」(清水,1998:212)と述べている。

この記述からも学生野球精神に則って、中等学校優勝野球大会が開催されたことがわかる。さらに大会の企画推進役の中尾済は大会の標語を「凡てを正しく、模範的に」とし、これは、本社幹部からこの精神を第一にするよう申し渡されたためである。朝日新聞社は中等野球を通して凡てを正しく、模範的な青少年の肉体的健康と精神的健全とを獲得する方法であると位置づけた。

このような経緯で朝日新聞社と全国中等学校野球連盟の主催によって大会が開始されるに至った。

1949年の学制改革によって6・3・3制が布かれ、それに伴って全国中等学校優勝野球大会は現在の全国高等学校野球選手権大会に改称し、全国中等学校野球連盟は、全国高等学校野球連盟へ組織が変わった。この年が高校野球元年となる。

翌年の1950年には、「日本学生野球憲章」が施行され、「高校球児らしさ」は形成されていく。

1-3 高等学校野球連盟の発足

学制改革によって高校野球は誕生したわけであるが、それに伴って全国高等学校野球連盟が結成され、その後、日本高等学校野球連盟(以下、高野連)に改称された後も独自に運営を行なってきた。高野連とは別に高等学校の運動部の加盟する連盟として全国高等学校体育連盟(以下、高体連)があるが、組織のでき方も目的も異なる別の組織である。高等学校総合体育大会(インターハイ)に野球が種目に入っていないことから一線を画していることが伺える。高野連は、日本学生野球憲章の掲げる「教育の一環」を軸として高

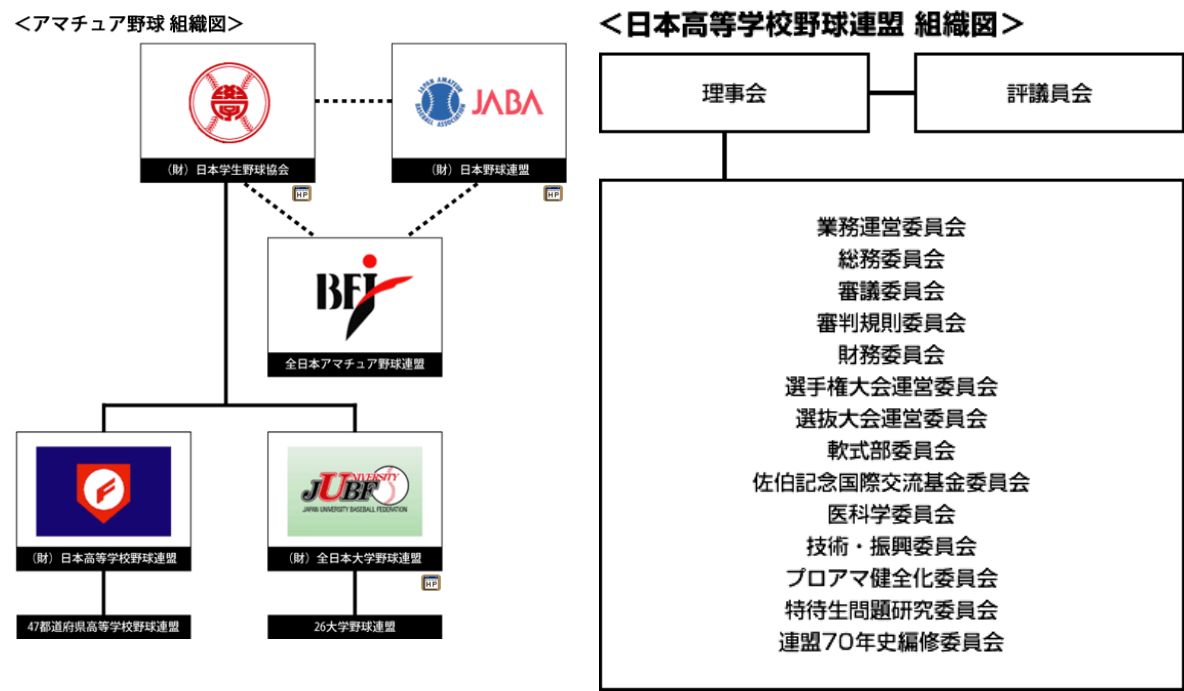
校野球を運営し、高校球児¹（以下、球児）の人間形成を目的として立派な球児を作り上げてきた。今や高校野球は夏の風物詩として国民的なイベントとなり、甲子園大会はもちろんのこと地方大会においても熱戦が繰り広げられる傍らで高野連は「高校球児らしさ」を提供することに力を注いでいる。

図 1-3 沿革

年	名称
1946	全国中等学校野球連盟
1949	全国高等学校野球連盟
1963	財団法人 日本高等学校野球連盟
2012	公益財団法人 日本高等学校野球連盟

日本高等学校野球連盟 HP より筆者作成

図 1-4 組織図



出所：公益法人 日本高等学校野球連盟 HP

¹ 本論文で意味する高校球児とは、日本高等学校野球連盟に加盟している硬式野球を行う野球部員を指す。

1-4 日本学生野球憲章が示す高校野球

1950年に「日本学生野球憲章」は施行され、本格的に高校野球の運営が始まった。高野連としては、「日本学生野球憲章」の前身として、1946年に「学生野球基準要項」が成立していたとしている。しかし、文部省が出した「野球統制令」が「日本学生野球憲章」の基礎となっているという見解もある。内容としても現在の「日本学生野球憲章」は、あくまで「学生野球基準要項」を引き継ぐかたちで作成された。「日本学生野球憲章」は、1963年、1965年、1971年、1978年、1979年、1992年、2010年、2012年の改正を経て現在に至っている。2010年には、全面改正がなされた。

ここでは、「日本学生野球憲章」において、どのような内容が明記され、それが高校野球にどのような影響を与えているのかについて考察していく。

1-4-1 前文

「日本学生野球憲章」の主旨を理解する上で前文を理解しておくことは非常に重要なことである。その意味で、そのまま引用することで高野連の考えがより明確に見えてくる。

「国民が等しく教育を受ける権利をもつことは憲法が保障するところであり、学生野球は、この権利を実現すべき学校教育の一環として位置づけられる。この意味で、学生野球は対価を求めず、心と身体を鍛える場である。

学生野球は、各校がそれぞれの教育理念に立つて行う教育活動の一環として展開されることを基礎として、他校との試合や大会への参加等の交流を通じて、一層普遍的な教育的意味を持つものとなる」（日本高等学校野球連盟 HP）。

特に、高校野球は、教育の一環として心や身体を鍛える場であるという要素が強く、「我が国社会全体からも支持され続けるであろう」という言葉で前文を締めくくっている。ここには、高野連の正当性について確固たる自信が見える。

1-4-2 総則

第2条に学生野球の目的が示されている。そこには「学生野球は、教育の一環であり、平和で民主的な人類社会の形成者として必要な資質を備えた人間の育成を目的とする」とある。各高等学校のホームページの野球部のページを参照してみると目標こそ違いはあるが、多くの学校が目的の欄に「人間形成」という言葉が書かれている。

さらに、興味深いのは、高体連との違いである。高体連の目的を参照すると「高等学校等生徒の健全な発達を促すために、体育・スポーツ活動の普及と発展を図ることを目的とする」と書かれている。高野連の「人間形成」に対して「体育・スポーツ活動の普及」となっているのである。

第4条には、学生野球を行う機会の保障が示されている。一方で、転校後1年間の公式戦の出場停止が定められている。連盟が認めた場合は例外であるが、それ以外には厳しい規則である。サッカーなどでは、6ヶ月間の出場停止であるようだが1年間の出場停止が適

切な期間であるかどうかは賛否両論ある。

第 5 条には、部員の権利と義務が示されている。第 2 項に「部員は、本憲章に基づく学生野球を行う権利を有し、かつ本憲章を遵守する義務を負う」と書かれている。「本憲章を遵守する義務」が根拠となって、しばしば逸脱行為（喫煙、飲酒、暴力行為等の不祥事）には、処分が下されている。

第 9 条には、加盟校および指導者の責務が示されている。そこには、「加盟校および指導者は、本憲章を遵守し、本憲章の理念に基づく学生野球の実現を目指す」と書かれている。指導者にも日本学生野球憲章の理念を周知徹底することで学生野球の存在意義を強化していくことができる。

1-4-3 学校教育の一環としての野球部活動

第 10 条には、学校教育と野球部活動との調和が示されている。そこには、「野球部の活動は、部員の教育を受ける権利を妨げてはならず、かつ部員の健康を害するものであってはならない」と書かれている。続けて第 2 項に「原則として、1 週間につき最低 1 日は野球部としての活動を行わない日を設ける」とある。

高野連が実施している実態調査によると表 1-1 のような結果が出た。表を参照すると週 6 日の学校が 6 割程を占めているが、野球部として活動を行なわない日は自主練習にしている学校も多いはずである。そのように考えれば、毎日練習している学校は数字には表れていないが現実としてはもっと高い数値になっていると考えられる。

表 1-1 高校野球実態調査

質問：週に何日練習していますか。

	1998 年度 ＜第 80 回調査結果＞ 回答校：3814 校 加盟校：4158 校 回答率：91.7%		2003 年度 ＜第 85 回調査結果＞ 回答校：4147 校 加盟校：4235 校 回答率：97.9%		2008 年度 ＜第 90 回調査結果＞ 回答校：4050 校 加盟校：4128 校 回答率：98.1%	
	%	校数	%	校数	%	校数
①1 日	0.2	8	0.1	4	0.2	7
②2 日	0.3	11	0.1	3	0.0	2
③3 日	0.3	11	0.3	13	0.2	8
④4 日	0.7	27	0.9	39	0.9	35
⑤5 日	3.5	134	4.3	177	3.3	132
⑥6 日	56.2	2144	60.6	2512	63.3	2564
⑦毎日	38.1	1455	33.4	1385	31.8	1289
非該当	0.6	24	0.3	14	0.3	13

全国高等学校野球選手権大会史より筆者作成

第 11 条には、加盟校の部員への指導が示されている。第 2 項に「加盟校および指導者は、部員に対して自ら人格を磨き、他の学生から信頼を受けるよう指導しなければならない」と書かれている。やはり、人間形成が重要なキーワードとして出てきており、さらに、他の学生に信頼される球児を育成することが指導者の義務として明記されている。

1-4-4 学生野球資格と他の野球団体などとの関係

かつて高校野球とプロ野球の間には大きな壁があった。現在では、緩和されつつあるが、未だに球児とプロ野球選手が交流するためには、条件がいくつかあり、制限されている。

第 15 条には、学生野球資格を持たない者との関係の基本原則が示されている。その中で、学生野球の発展を目的として、日本学生野球協会の承認を受けた者としてしか交流できないようになっている。交流できる活動も次のように定められている。

- (1) 練習、試合
- (2) 講習会、シンポジウムなど
- (3) その他学生野球の発展に資する活動

また、活動を行うにあたり、4 つの原則を遵守しなければならないことも合わせて記載されている。

ここまで規制が厳しいのも、プロは商業的要素が強く、学生野球は教育的要素が強いため目的が異なり、球児を商業的に利用させないためであると考えられる。

1-4-5 学生野球にかかわる寄附または援助

「野球と金」は切っても切り離せない関係である。その中で、西武ライオンズ球団の裏金問題は記憶に新しいだろう。この問題が発端となり、高野連は、特待生問題などにも調査に乗り出し、高校野球界は混乱に陥った。

特待生問題で問題になった改正前の条文を見てみると、第 13 条に野球を目的に金品等を受け取ることを禁止した条文で「いかなる名義であっても他から選手、部員であることを理由に学費、生活費その他の金品を受けることができない」と記載されていた。改正後、第 23 条に、部員が野球に関して援助を受けることに関する基本原則が示されている。そこには、「部員は、野球部に現に在籍しているか否かを問わず部員であることまたは学生野球を行うことに対する援助、対価または試合や大会の成績によって得られる褒賞として金品を受け取ってはならない」。続けて、第 2 項で「部員は、次に定めるものを除き、加盟校から経済的な特典を受けてはならない。①奨学金制度に基づく金品の貸与または支給、②全日本大学野球連盟または日本高等学校野球連盟が定める基準に基づく、入学および在籍に必要な費用の一部または全部の免除」と規定されている。この条文が全面的に改正に至った背景として、実際に特待生を採用している学校の数が予想以上に多かったこと、私立学校の経営を制限することは妥当なのかなど、学校や世間の強い反発があったからであると考えられる。

特待生問題は筆者が高校 1 年生の春に問題になり、入部して間もなく特待生の対外試合禁止という処分が下され、春の大会は辞退し、5 月の練習試合も禁止されるという球児にとっては、あまりに残酷な処分であった。

1-4-6 注意・嚴重注意および処分

高校野球では、しばしば不祥事が起きてしまう。その度にメディアに取り上げられ問題となる。野球部の不祥事については、よく耳にするが、それ以外の部活動に関してはあまり耳にしない。2012 年に起きた大阪市立桜宮高等学校男子バスケットボール部の体罰事件は大きく取り上げられ、部活動の在り方が問われたものの、これはあくまで教員の不祥事である。野球部の場合、多くは飲酒、喫煙、暴力行為等の選手の不祥事が報道される。これらの行動をとったものは「高校球児らしさ」の逸脱行為として処分される。

第 29 条には、日本学生野球憲章違反に対する処分について書かれている。第 2 項に、「部員または指導者が、本憲章に違反する行為をした場合には、当該加盟校の野球部に対しても処分することができる」とある。これは、連帯責任を負わせる可能性があることを示唆している。この条文はまだ理解できるが、第 3 項を見ると「加盟校を設置する法人の役員または前項以外の教職員、応援団もしくはその他学校関係者が、本憲章に違反する行為をした場合には、当該加盟校の指導者または野球部に対して処分をすることができる」とある。筆者は、この条文に関しては理解することができない。高野連に加盟していない生徒や野球部指導に直接関与していない教職員の不祥事までも野球部が責任を取られる可能性があるということは連帯責任の域を超えているのではないか。

1-5 高校野球の実態

今日、サッカー人気に押され野球の競技人口が減少していると言われることがしばしばある。子どもの数が減少している現状の中で競技人口が減少していくことは仕方のないことと言える。しかし、本当に野球は人気がなくなってしまったのだろうか。表 1-2 を見ていただきたい。

部員総数は、2009 年の 169449 人をピークに減少傾向にあるものの、それまで少子化と言われる中でも増加を続けてきた。また、加盟校数は 2005 年の 4253 校から年々減少しているが高校あたりの平均部員数は増加し続け、2013 年には 41.3 人となっている。

この現象の要因として考えられるのは、高野連が柔軟な対応をとり始めていることが挙げられる。部員不足や統廃合を理由に大会の出場を辞退する学校が見られるようになり、連合チームを認める方針を打ち出したのだ。1997 年に高野連は「統廃合による大会参加の特別措置」を承認し、2013 年は 31 校が出場している。

表 1-2 加盟校部員数

年度 (年)	加盟校部員総数 (人)	加盟校数 (校)	1校あたりの平均部員数 (人)
2003	154175	4223	36.5
2004	160801	4230	38.0
2005	165293	4253	38.9
2006	166314	4242	39.2
2007	168501	4192	40.2
2008	169298	4163	40.7
2009	169449	4132	41.0
2010	168488	4115	40.9
2011	166925	4090	40.8
2012	168144	4071	41.3
2013	167088	4048	41.3

日本高等学校野球連盟 HP より筆者作成

1-6 小括

本章では、高校野球が成立するまでの大まかな流れと日本学生野球憲章の内容について見てきた。「一高野球精神」すなわち武士道精神は今日においても高校野球の柱として受け継がれていることがわかった。今日に至る過程には、あらゆる批判にも屈せず、学生野球の正当性を信じ続け、精神修養と鍛錬に努めた先人たちがいたからこそ長い間続けられ、国民から愛される大衆スポーツとして発達してきたのである。

Jリーグが誕生して以来、野球人気はサッカー人気に負けていると耳にすることが多くなった。しかし、現段階では野球人気は衰えたと言えるような結果は出ていない。これからは、プロ野球と学生野球が連携強化を図り、野球の発展と選手育成に力を注ぎ、少子化の中でも競技人口が増加し続けるよう魅力あるスポーツにしていかなければならない。

補論 学習指導要領と部活動

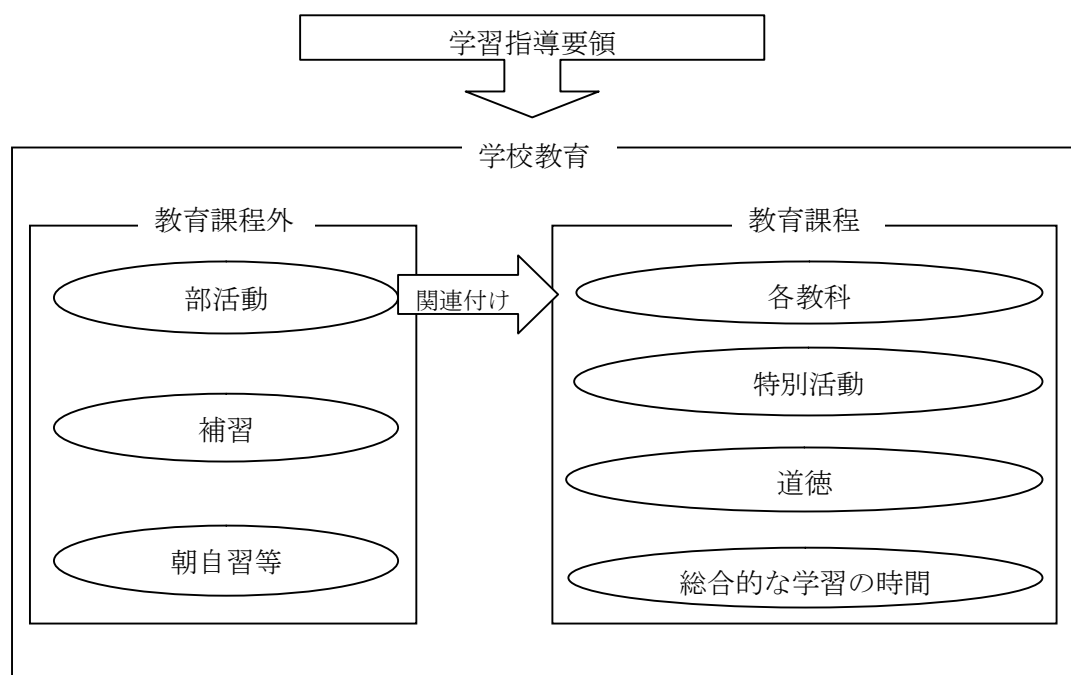
2008（平成 20）年に改訂された学習指導要領において、これまで言及されてこなかった部活動に関する意義や留意点が加えられた。中央教育審議会の答申において、「生徒の自発的・自主的な活動として行われている部活動について、学校教育活動の一環としてこれまで高等学校教育において果たしてきた意義や役割を踏まえ、教育課程に関連する事項として、学習指導要領に記述することが必要である」という指摘がなされた。部活動と教育課程の関連を図る必要性について学習指導要領に記述されたことで、これまで以上に部活動の教育的意義が求められる。高等学校においては、1969 年にクラブ活動が教育課程におい

て実施され、教育課程以外の活動として部活動が行われていたってからである。しかし、1999年には高等学校の教育課程からクラブ活動は廃止され、部活動が教育課程外の活動として行われるようになった。つまり、部活動は1969年以降現在に至るまで行われているということになる。部活動は当初から教育課程の活動として行われていないものの、学校教育で長年にわたって行われており、教育効果が見込める活動であると考えることができる。

しかし、部活動が教育課程外の活動でありながらこれまで発展してきた経緯には教員の働きが非常に大きいと考えられる。教員の教育観点から部活動の指導が行われてきたからこそ、教育課程外の部活動に教育効果が見込まれているのであり、学習指導要領において部活動を教育課程と関連付けることが必要とされている。

学習指導要領に加えられたということは、法的根拠を持つということ进行する。これは、指導者の指導が教育的に意義があるのか問われるということになる。問題なのは、職業監督といわれる、教員ではない外部の監督が勝利至上主義に偏り、教育的意義を無視して指導することである。

図 1-5 学校教育における部活動の位置づけ



筆者作成

第2章 高校野球の行動様式

2-1 入場行進

入場行進は、大会の開会式の中でも最初に行われるものであることから、大会の開催において非常に重要な意味合いを持つ。球児は内野と外野の連絡通路から入場し、1塁側のラインに沿って進み、ホームベース付近で学校名がアナウンスされ、そのまま3塁側のラインに沿って進んで、レフトの定位置辺りを通りセンターの定位置辺りまで行く。その間、200mほどあるが、軽く拳を握り、肩の位置まで腕を上げ、脚は地面と平行まで上げながら「1・1・1・2」や「1・2・1・2」という

掛け声のもと18名全員が息を合わせ行進する。全ての学校がやっているわけではないが公立、私立問わず行っているチームがほとんどである。行進練習をする学校もあるということからも入場行進の重要さがわかる。このことから、入場行進は高校野球における行動様式の一つであると考えることができる。

朝西は入場行進の心理的効果について、「一定の隊列を組み、足並みを揃えて進むことは、戦いに対する勇気、集中力、決断力、冷静さを育み、恐怖を克服する効果がある」（朝西,2002:53）としている。

2-1-1 高校野球の儀式性

大会が始まる際に行われる開会式は様々なスポーツで行われている。しかし、特に高校野球では儀式性の非常に高いものとなっている。軍隊を思わせるような腕と脚が一糸乱れない入場行進に始まり、選手はもちろん観客にも脱帽、起立を求めている国旗、大会旗等の掲揚、優勝旗返還、大会役員挨拶、選手宣誓という流れである。

国旗、大会旗掲揚では、炎天下の中行われる大会において最も懸念されることは熱中症である。主催者も試合中のインニングの合間に「小マメな水分補給をして熱中症にお気を付けください」というようなアナウンスをし、熱中症予防に努めている反面で国旗掲揚の際には脱帽するよう求めるといような矛盾もある。しかし、観客も当然のこのように脱帽、起立をして国旗、大会旗の掲揚を見つめている。2006年の第88回選手権奈良大会の選手宣誓では、聞いている人への配慮からシンプルに短く行った例もあった。

長い歴史の中で確立された開会式という儀式は高校野球の厳格さと正当性を主張する上で欠かせないものとなっていることは言うまでもない。

それだけではなく高校野球というスポーツは、球児は勿論、観客も球場に1歩踏み入れ

図 2-1 入場行進



出所：朝日新聞デジタル

た途端に、球児はパフォーマーとして、観客はオーディエンスになりきって球場全体が劇場と化す。

2-2 選手宣誓

選手宣誓は、球児が大会役員、審判、選手、観客の前でこの大会にかける思いを全ての人前で宣誓するものである。選手宣誓は他のスポーツにおいても行われているが高校野球の選手宣誓には、ある特徴がある。一般的な選手宣誓の例としては、「宣誓、我々選手一同は、日頃の練習の成果を十分に発揮し正々堂々と戦い抜くことを誓います」のような感じである。高校野球も昔は、例のような宣誓が多かったが、30年程前から変化してきており、その証拠に、1982年7月19日付の京都新聞に「工夫をこらした宣誓」という小見出しで記事になっている。その選手宣誓の内容は「高校球児らしさ」が盛り込まれたものとなっている。その「高校球児らしさ」とは、高野連や朝日新聞社が求める高校球児像と一致するものであって、高校野球ファンが求める高校球児像とも一致していると考えられる。少し大袈裟ではあるが私には、球児自らが「みなさんの求める高校球児を精一杯演じることを誓います」と言っているようにも聞こえてくる。このように、球児たちは球児としての自分のあるべき姿を自覚しており、それに見合うようにプレーすることが求められていると考えていることが選手宣誓の中から伺える。

図 2-2 選手宣誓



出所：共同通信社

2-2-1 選手宣誓のメッセージ性

近年の選手宣誓には、メッセージ性が強く現れている。選手権大会やセンバツ大会での全国の球児への言葉、震災後の被災地への励ましの言葉、野球をやらせてもらっている環境への感謝の言葉など聞いている人が感動するような選手宣誓が多い。

特に、震災後の選手権大会やセンバツ大会での選手宣誓は、テレビを通して被災者をはじめ、多くの国民に見られることから興味深い選手宣誓となっている。震災12日後に行われたセンバツ大会での選手宣誓を引用したい。「宣誓 私たちは16年前、阪神・淡路大震災の年に生まれました。今、東日本大震災で多くの尊い命が奪われ、私たちの心は悲しみでいっぱいです。被災地ではすべての方々が一丸となり仲間と共に頑張っておられます。人は仲間を支えられることで大きな困難を乗り越えることができると信じています。私たちに今できること、それはこの大会を精一杯、元気を出して戦うことです。頑張ろう、日本。生かされている命に感謝し、全身全霊で正々堂々とプレーすることを誓います」と言

っているように被災地に向けたメッセージが大半を占めている。震災直後は大会を開催すること自体、危うい状況であり、球児自身も本当に大会を行って良いのかという葛藤と戦いながら試合に臨んでいたのだと考えられる。そのため、震災後の選手宣誓では「野球のできる環境に感謝する」というような文言が多く遣われるようになった。

2-2-2 高校球児らしさのキーワード

1994年から2013年までに行われた47回の選手宣誓の出現語彙の回数を調べた。選手宣誓の全文が確認できるものや映像資料によって確認できるものが多いため、サンプルの時代、地域に偏りがでてしまったが、限られた資料の中でもある特徴が見つかった。

表2-2は出現回数が5回以上のものを挙げ、その出現語彙を東日本大震災（以下、震災）前と後で分けることで、球児が高校野球を行う上での役割が見えてきた。出現語彙を整理するにあたり定義付けを行っておかなければならない。文脈から同義と認められるものに関しては同一語彙としてまとめる（表2-1）。

表2-2を参照すると、高校野球を象徴するキーワードが多く出現していることがわかる。これらのキーワードは、高校野球観と言い換えることもできる。長い間、変化することなく発展してきたからこそ、現在まで国民に愛されてきた反面で、高校野球のあるべき姿を固執したものとなった要因であると考えられる。

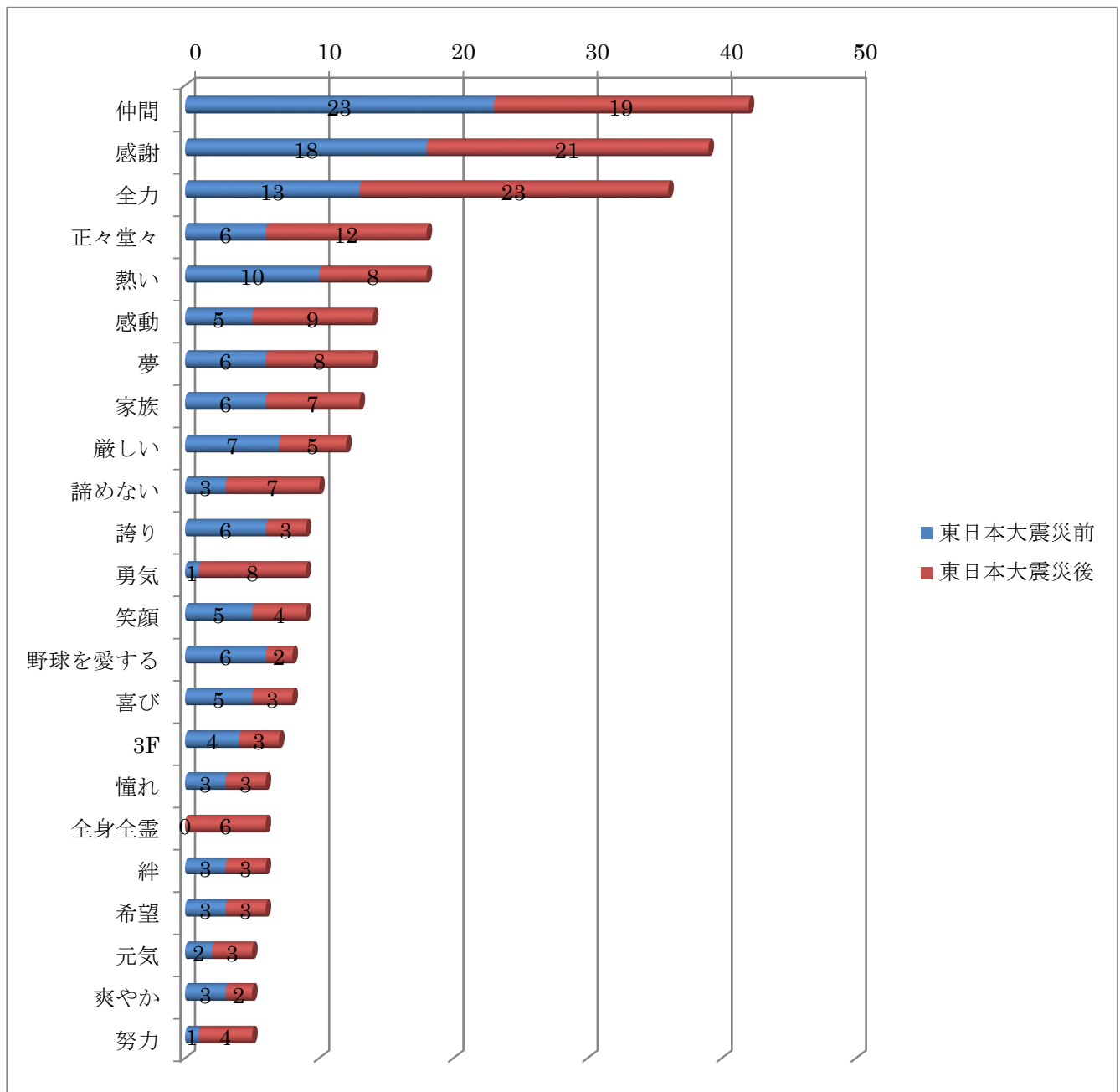
以下では、いくつかの語彙をピックアップし考察していく。

表 2-1 定義

キーワード	同義語
仲間	チームメイト
厳しい	苦しい、辛い
野球を愛する	大好きな野球
全力	力一杯、精一杯
家族	保護者
笑顔	笑い
3F	ファイト・フェアプレー・フレンドシップ

筆者作成

表 2-2 選手宣誓の出現語彙



筆者作成

2-2-2-1 仲間

「仲間」という語彙について、震災前後で大きな差異が見られた。震災前ではチームメイトや地方大会で敗れた球児を指すことが多かった。しかし、震災後は被災地の球児や全国の球児を指す意味合いに変化している。その背景として、震災によって野球をする機会

を奪われた球児や再び野球ができるようになって仮設住宅生活を強いられ、満足に野球のできる環境にいない球児がいる中で、試合ができていることに対する有り難みや困難に立ち向かいながらも同じ夢を追いかけている球児への思いが込められていると考えられる。いくつかの選手宣誓を抜粋すると、「東北では未だに野球が満足にできない多くの仲間がいます」、「日本中のみんなが仲間です」、「全国の仲間が憧れたこの甲子園で」という文言からも高校野球における「仲間」の概念が変化しつつあると考えられる。特に、この傾向は選手権大会とセンバツ大会で強く見られるが、地方大会レベルにおいても見られるようになったことが重要なことである。

しかし、「仲間」という語彙がチームメイトを指さなくなったわけではない。なぜなら、被災地の球児や全国の球児は仮想に過ぎず、チームメイトは苦しいときも、嬉しいことも共有してきた「仲間」という事実是不変だからである。日々の練習などに触れたい場合には「チームメイト」という語彙を用いる球児もいる。

2-2-2-2 感謝

選手宣誓において、「感謝」という語彙を使う場合、2つの意味で用いられる。日頃から熱心に指導してくれる指導者や支えてくれている保護者への感謝の気持ち、そして、野球のできる環境への感謝の気持ちである。

前者は、指導者の指導が身体的にも精神的にも自分を大きく成長させてくれたこと、保護者は高校生になるまで育ててくれて、大好きな野球を何不自由なくやらせてもらえていることへの感謝の気持ちである。一方、後者は、今、グラウンドに立てていることへの感謝の気持ちである。五体満足な体を持ち、野球をするのに必要な道具が揃っており、試合のできる仲間がいる。これらの条件のすべてを満たすことは決して当たり前のことではないことを球児は理解しているのである。特に、震災後にはそれが顕著に表れていることから、改めて、野球ができている幸せを噛み締めながら試合をしようと考えていることがわかる。

2-2-2-3 全力

「全力」という語彙は、震災前後で最も増加した語彙である。なぜ、球児たちは「全力」という語彙を使おうと考えたのだろうか。2012年3月21日にセンバツ大会で行われた選手宣誓の一部を引用する。奇しくも、選手宣誓を行ったのは甚大な被害を受けた宮城県石巻工業高等学校の主将であった。「我々、高校球児にできること、それは、全力で戦い抜き、最後まで諦めないことです」と言い切った。被災者の1人として1年間震災に向き合ってきた球児が出した1つの答えである。「諦めない」という語彙も倍以上に増加していることから、この選手宣誓の一文は高校野球の役割を再認識させたといえる。

選手宣誓で言っている「全力」が指すものは、全力疾走、全力プレー、全力発声であると考えられる。これをチームのスローガンとするチームもあるほど、高校野球においては

重要な要素である。この 3 点を行うことで感動、勇気、希望などを与えることができると球児たちが考えていることが選手宣誓の中から読み取れる。

2-2-2-4 勇気

「勇気」という語彙は、震災前は 1 回しか出現してこなかったのに対して、震災後は 8 回も出現している。「勇気」だけで用いられることは少なく、「感動」、「笑顔」、「絆」などと一緒に用いられることが多い。使われ方としては、被災地や被災者について述べた上で、「日本中に届けます。感動、勇気、そして笑顔を」というように用いられている。

「一高野球精神」の一つであった剛健勇武の精神のように、どんなに厳しい状況に直面しても決して諦めずに最後まで勇敢に立ち向かう姿勢がオーディエンスへ「勇気」を与えるのである。しかし、その条件としてオーディエンスが球児に対してマイナスのイメージを持っていないことが必要である。

2-2-2-5 全身全霊

「全身全霊」という語彙は、確認できた選手宣誓の中では、震災後のみであった。これは何を意味するのか。そもそも、「全身全霊」はその人に備わっている体力と精神力の全てを意味する。しかし、それでは理由として不十分である。筆者は、「仲間」の意味合いが拡大解釈されているのに伴って、「全身全霊」という語彙が「全」国の球児の「身」体と「全」国の球児の「霊」を表現するのに最適な語彙であり、特に選手権大会やセンバツ大会では負けたチームの思いや被災地の球児の思いを背負ってプレーするという代表としての責任から用いられたと考えている。震災から 12 日後に行われたセンバツ大会で「生かされている命に感謝し、全身全霊で正々堂々とプレーすることを誓います」という選手宣誓からも球児だけではなく、震災で命を落とした方々への思いも込められていたと考えられる。

2-3 ヘッドスライディング

高校野球において、ヘッドスライディング見る場面は多い。特に、公式戦の最後の打者が内野ゴロを打った際には、ほとんどの打者が 1 塁へ駆け抜けずヘッドスライディングを試みる。なぜ駆け抜けた方が速いとされる野球において、球児たちはヘッドスライディングをするのだろうか。また、怪我のリスクが高いにも関わらずヘッドスライディングを選択するのだろうか。球児の心理として、アウトになりそうな打球でも少しでもベースまで速く走りたい、アウトのコールを聞くまで諦めないという試合に対する強い気持ちをもって。そのような気持ちをもった球児が長い間積み重

図 2-3 ヘッドスライディング



出所：朝日新聞デジタル

ねてきたことにより執念の象徴としてパターン化され、高校野球の行動様式の一つとなったと考えられる。際どいジャッジになると審判は、勢いでセーフとコールしてしまうこともしばしばある。

2-4 ガッツポーズ

高校野球においては、教育の一環という考えから、高野連が球児に対してガッツポーズを慎むように指導している。しかし、試合を見ていると多くの球児がガッツポーズをしている姿を目にする。投手が三振を奪ったとき、打者がホームランを打ったとき、試合に勝利したときなど喜びを表現してしまうことは自然体のことであり、ある程度は黙認されている。しかし、今日、四死球を受けた後のガッツポーズが厳しく指導されるようになったのだが、筆者はこの高野連の対応に賛同できない。なぜなら、球児は指導者から「フォアボールやデッドボールもヒットと同じだ」と言われたり、チームによっては「ベースよりに立って際どいのは当たりにいけ」というような指導や指示もされる。相手投手を攻略するために体を張って結果を出したのに喜んで何が悪いのかと考えている。それを「高校生らしさ」がないからといって規制することは本当に正しいことなのだろうか。

剣道を例に挙げると、ガッツポーズをすると 1 本が取り消されるというルールがあることから、武士道精神を重んずるスポーツにおいてガッツポーズなどの感情表現はタブーなのだろうか。

2-4-1 「バーン」ポーズ

「バーン」ポーズとは、松井稼頭央（東北楽天ゴールデンイーグルス）がメジャーリーグから持ち込んだものであり、驚掴みのようなポーズである。第 3 回 WBC（World Baseball Classic）で話題になり、球児の間でも流行り始めた。しかし、センバツ大会を控え高野連が禁止令を出した。高野連の見解としては、ガッツポーズと同様の趣旨ではあるが、「バーン」ポーズは通常のガッツポーズとは異なり、故意的に行われるものであるとして禁止された。高野連によって喜びの表現の仕方までも規制されることについて疑問を持たずにはいられない。

図 2-4 ガッツポーズ



出所：球ちゃんブログ

図 2-5 「バーン」ポーズ



出所：高校野球ドッドコム

2-5 伝令

高校野球では 1 試合に両チーム攻守各 3 回までの伝令が認められている(プレイヤーがタイムをとりマウンドに 3 人以上集まったときも 1 回とする)。伝令とは、監督からの指示を受けた控え球児がベンチから飛び出していきマウンドに投手と捕手を含む内野手を集め(または、打者や走者のもとへ行き)、監督の指示を伝える行為またはその球児を指す。高校野球ではタイムをとって直接的に監督が球児に指示することは認められていないため伝令はピンチやチャンスにおいて監督の考えや言葉をグラウンドでプレーする球児に伝えるという役割があり、勝敗をも左右しかねない重要な仕事である。伝令は誰もが任されるわけではなく、チームや監督から信頼の厚い球児、雰囲気を変えられるような球児が選ばれる。

高校野球の伝令での行動様式は監督の指示を伝えた後にある。チームによってルーティンがあり、軽くジャンプしたり、目を閉じて深呼吸をしたり、人差し指を空に突き上げたりする。伝令でルーティンを行うことで気持ちを整理し落ち着かせる効果もあることから、ピンチにおいては非常に重要である。駒沢大学附属苫小牧高等学校の人差し指を空に突き上げるポーズは有名であり、優勝したときにナンバーワンという意味を込めて行うチームが増えた。これは、高校野球特有のものであり、誰もが見たことのある光景であると考えられる。

2-6 不祥事(逸脱行為)

高校野球では、多くの球児や指導者による不祥事が起きている。表 2-3 に示したように球児(硬式)の不祥事によって 2013 年 1 月から 11 月まで対外試合禁止の処分を受けたチームが全国で 42 校におよんでいる。その中でも多いのが部内暴力 20 件、部内いじめ 13 件である。その他にも対外試合禁止までの処分を受けなくても多くの不祥事が起きていることは間違いない。特記すべきは、私立高校(14 件)よりも公立高校(26 件)の方が対外試合禁止にまでなる不祥事が多いということである。不祥事は私立高校に多いという印象を持ちがちではあるが、およそ 3 校に 2 校が公立高校というのが現状である。

これらの不祥事はメディアによって表沙汰になることも多いことから、高校野球は常に社会からの厳しい目によって監視されながら活動しているといえる。常に「高校球児らしい」行動を求められており、その行動を逸脱することは決して許されない。そのように考えると高校野球には高い倫理性が求められていることがわかる。

図 2-6 伝令



出所：球ちゃんブログ

表 2-3 2013 年硬式野球部対外試合禁止処分案件（1 月～11 月）

都道府県	公私	学校名	内容	処分期間
岩手	県	大迫	部員 3 人に部内暴力といじめ	6 ヶ月
東京	私	大森学園	部員 2 人による部内暴力	3 ヶ月
新潟	県	十日町	部員 5 人による部内いじめ	1 ヶ月
大阪	私	初芝立命館	部員 11 人の賭けトランプ	1 ヶ月
大阪	私	大商大塚	部員 3 人による部内暴力	1 ヶ月
岡山	私	作陽	部員 4 人による部内暴力	3 ヶ月
奈良	県	高取国際	部員 3 人による部内いじめ	3 ヶ月
大阪	府	吹田	部員 7 人による部内いじめ	1 ヶ月
沖縄	県	那覇工	部員 4 人による暴力と物品強要	3 ヶ月
京都	私	京都文教	部員 4 人の下級生へのいじめや暴力	6 ヶ月
		非公表	部員 3 人による同校生徒へのわいせつ行為	6 ヶ月
高知	県	高知工	部員 2 人の暴力	1 ヶ月
富山	県	富山商	部員 3 人の暴力	3 ヶ月
鳥取	私	倉吉北	部員の暴力と喫煙	1 年
京都	私	京都広学館	部員の暴力	約 6 ヶ月
大阪	私	大阪	部員の暴力	6 ヶ月
新潟	県	西新発田	部員のいじめ	6 ヶ月
和歌山	県	日高中津	部員の喫煙	6 ヶ月
三重	県	四日市中央工	部員の暴力	6 ヶ月
大阪	府	北かわち阜が丘	部員のいじめ	3 ヶ月
静岡	私	島田樟誠	部員のいじめ	3 ヶ月
兵庫	県	上郡	部員の喫煙と暴力	1 ヶ月
千葉	県	館山総合	部員の部内暴力	2 ヶ月
兵庫	私	相生学院	部員の占有離脱物横領、無免許運転	1 ヶ月
宮崎	県	都城商	部員の暴力	約 1 ヶ月
秋田	県	矢島	部員のいじめ	1 ヶ月
和歌山	県	笠田	部員の暴力	1 ヶ月
奈良	県	二階堂	部員の暴力	約 1 ヶ月
神奈川	県	相模原青陵	部員 12 人の喫煙	3 ヶ月
東京	私	城西大城西	部員の暴力	1 ヶ月
東京	都	拝島	部員のいじめ	1 ヶ月
長野	公	飯田長姫	部員の暴力	1 ヶ月

都道府県	公私	学校名	内容	処分期間
山梨	私	日本航空	部員の喫煙、飲酒	3 ヶ月
広島	県	三原	部員のいじめ	1 ヶ月
福岡	私	豊国学園	部員の暴力	3 ヶ月
愛知	県	岡崎商	部員の窃盗など	3 ヶ月
三重	県	飯南	部員の喫煙やバイク窃盗など	1 ヶ月
愛知	県	一色	部員間のいじめ	1 ヶ月
静岡	市	静岡市商	部員の器物破損や暴力	1 ヶ月
		非公表	部員の強制わいせつ	1 ヶ月
東京	私	東京	部員の部内暴力、いじめ、窃盗、飲酒	6 ヶ月
兵庫	県	龍野	部員の知的障害者への嫌がらせ行為	約 6 ヶ月

秋田県野球フォーラム筆者作成

2-6-1 体罰

現在の教育界では、どのような状況であろうとも体罰をすることは許されていない。学校教育法第 11 条に「校長及び教員は教育上必要があると認めたときには、文部科学大臣の定めるところにより、児童、生徒及び学生に懲戒を加えることができる。ただし体罰を加えることはできない」とある。しかし、高校野球においては未だに体罰があとを絶たない。2013 年 1 月から 11 月までの高校野球指導者の不祥事を示したものが表 2-4 である。指導者の不祥事は 104 件であり、そのうち体罰によって処分されたのは 77 件であった。

この結果からも、高校野球から体罰は無くなっておらず、むしろ体罰に対して寛容な姿勢が見える。その背景として、高校野球は精神修養の要素が今もなお強く現れており、多少の体罰は球児の精神面を強化する（忍耐力を養うなど）上で必要であると考えている指導者がいるからである。2013 年 7 月 2 日付の朝日新聞で指導者の 1 割が体罰は必要と考えていることが明らかになったと記している。

なぜ、体罰が見直されている今日でも、体罰容認の指導者が 1 割もいるのだろうか。指導者というのは、今までの自分の経験を下に指導にあたる場合が多いと考えられる。練習メニューを考える際にも高校や大学で行っていたトレーニングや技術練習を基盤に構成されている場合が多いはずである。一方で精神面を鍛えるために、現在ではメンタルトレーニングが普及し導入しているチームも増えつつあるが、現在の監督、部長（責任教師）が球児だった年代はメンタルトレーニングはなく、監督の罵声や体罰を耐えることで精神力を鍛えてきたと思い込んでいる指導者もいると考えられる。それを現在にも引き継いでしまったことが、今日の結果に現れていると考えている。

表 2-4 からわかるように、球児の不祥事同様に私立高校（28 件）を公立高校（49 件）が上回った。これらの結果を受け、今後、高校野球は抜本的な改革の必要性がある。

表 2-4 高校野球指導者の体罰の処分（1 月～11 月）

都道府県	公私	学校名	役職	処分
大阪	私	上宮	監督	3 カ月の謹慎
北海道	私	札幌新陽	部長	4 カ月の謹慎
北海道	私	札幌新陽	監督	2 カ月の謹慎
奈良	私	帝塚山	監督	3 カ月の謹慎
神奈川	県	神奈川工	部長兼監督	1 年の謹慎
北海道	私	札幌創成	部長	3 カ月の謹慎
北海道	私	札幌創成	監督	6 カ月の謹慎
北海道	私	札幌創成	顧問	1 カ月の謹慎
香川	国	香川高専高松	監督	1 カ月の謹慎
佐賀	県	唐津西	監督	1 カ月の謹慎
山形	私	東海大山形	監督	2 年の謹慎
青森	県	弘前実	部長	3 カ月の謹慎
宮崎	私	都城東	副部長	3 ヶ月の謹慎
千葉	私	柏日体	部長	3 ヶ月の謹慎
愛知	私	享栄	部長	1 ヶ月の謹慎
熊本	私	ルーテル学院	部長	1 カ月の謹慎
山口	私	柳井学園	副部長	1 カ月の謹慎
東京	都	小平西	監督	3 カ月の謹慎
沖縄	県	真和志	元監督	3 カ月の謹慎
三重	県	伊賀白鳳	監督	3 カ月の謹慎
東京	都	総合工科	顧問	6 カ月の謹慎
静岡	県	裾野	副部長	3 カ月の対外試合禁止
岩手	県	釜石	部長	3 カ月の対外試合禁止
茨城	私	明秀日立	コーチ	3 カ月の対外試合禁止
千葉	私	東海大浦安	コーチ	3 カ月の対外試合禁止
千葉	県	九十九里	監督	1 年の対外試合禁止
福岡	私	星琳	部長	2 カ月の対外試合禁止
新潟	県	新潟東	監督	6 カ月の対外試合禁止
静岡	私	浜松学院	監督	4 カ月の対外試合禁止
兵庫	県	太子	監督	6 カ月の謹慎
福岡	私	筑陽学園	監督	3 カ月の謹慎
神奈川	県	寒川	監督	3 カ月の謹慎
京都	府	田辺	監督	3 カ月の謹慎
富山	県	富山北部	監督	3 カ月の謹慎

都道府県	公私	学校名	役職	処分
静岡	県	清水西	監督	1ヵ月の謹慎
静岡	県	伊豆中央	監督	1ヵ月の謹慎
群馬	県	太田工	部長	1ヵ月の謹慎
兵庫	県	神戸鈴蘭台	監督	4ヵ月の謹慎
山形	県	村山農	監督	1ヵ月の謹慎
静岡	県	掛川工	監督	1ヵ月の謹慎
熊本	県	翔陽	監督	1ヵ月の謹慎
熊本	県	翔陽	部長	1ヵ月の謹慎
熊本	県	八代	監督	1ヵ月の謹慎
千葉	県	実籾	監督	6ヵ月の謹慎
福岡	県	筑紫	監督	1ヵ月の謹慎
京都	私	京都国際	監督	1ヵ月の謹慎
岐阜	県	岐山	監督	3ヵ月の謹慎
大阪	府	北かわち阜が丘	監督	1ヵ月の謹慎
大阪	府	寝屋川	監督	1ヵ月の謹慎
栃木	県	那須拓陽	監督	1年の謹慎
岐阜	私	中京	監督	2ヵ月の謹慎
滋賀	県	虎姫	監督	6ヵ月の謹慎
埼玉	県	南陵	監督	3ヵ月の謹慎
大阪	府	懐風館	監督	4ヵ月の謹慎
千葉	私	千葉学芸	監督	4ヵ月の謹慎
東京	都	雪谷	監督	3ヵ月の謹慎
千葉	県	京葉工	監督	1ヵ月の謹慎
千葉	県	成東	監督	1ヵ月の謹慎
北海道	道	栗山	監督	3ヵ月の謹慎
東京	都	保谷	監督	6ヵ月の謹慎
大阪	府	布施工科	監督	6ヵ月の謹慎
神奈川	県	相模原青陵	監督	6ヵ月の謹慎
神奈川	県	相模原青陵	顧問	1年の謹慎
大阪	府	堺西	部長兼監督	6ヵ月の謹慎
埼玉	私	本庄一	コーチ	2ヵ月の謹慎
千葉	県	松戸馬橋	コーチ	1年の謹慎
栃木	私	矢板中央	部長	6ヵ月の謹慎
大阪	私	大産大付	部長	1ヵ月の謹慎

都道府県	公私	学校名	役職	処分
大阪	私	大産大付	コーチ	1ヵ月の謹慎
大阪	市	汎愛	監督	2ヵ月の謹慎
千葉	私	柏日体	監督	3ヵ月の謹慎
山梨	私	富士学苑	監督	4ヵ月の謹慎
富山	県	入善	監督	3ヵ月の謹慎
徳島	県	穴吹	監督	3ヵ月の謹慎
滋賀	県	伊吹	監督	1ヵ月の謹慎
滋賀	私	綾羽	監督	1ヵ月の謹慎
富山	県	滑川	監督	3ヵ月の謹慎

秋田県野球フォーラムより筆者作成

2-7 小括

高校野球のいくつかの行動様式について見てきた。これらは、長い歴史の中で創りあげられ、「高校球児らしさ」を形成する一つの要素である。

特に、入場行進で隊列を崩さずに腕と脚を上げ下げする様は軍隊を思わせるものである。規律を重んじる軍隊精神は武士道精神とも通じる部分があるため、高校野球においても長年にわたって実施されていると考えられる。

選手宣誓については、高校球児を連想するようなキーワードが多く使われていることがわかった。特に、震災後の選手宣誓では、メッセージ性が非常に高いものとなっており、高校野球の在り方や存在意義を明らかになった。さらに、選手宣誓において高校球児自らが言うということは、「高校球児らしさ」を理解しているということの表れである。さらに、「高校球児らしさ」だけではなく、球児の野球を通して担うべき役割についても自覚している。

ヘッドスライディング、ガッツポーズは球児の勝利に対する執念を表す行為である。しかし、ガッツポーズに関して高野連は否定的であり、「高校球児らしさ」を損ないかねない行き過ぎた行為については指導している。

伝令は、試合の流れをも左右しかねない重要なものである。3回しかないため、どの場面で使うのがポイントである。最後に行われるルーティンは気持ちを落ち着かせる効果があり、チームによって様々あるため興味深い。

不祥事や体罰について、私立高校よりも公立高校で起きている件数が多いことがわかった。特に体罰は高校野球において精神修養のため必要だと考えている指導者がいるという現状もある。それに対して、高校野球に対する社会から目は非常に厳しく、メディアも不祥事が起きた際には記事にされることから、高校野球には高い倫理性が求められていることがわかった。

第3章 高校球児を演じる高校生

球児は、学校、部活動、家庭、地域などにおいて、それぞれの役割を期待されている。その期待に応えるために、それに見合った行動をとっていることがわかった。そのような行動をとる背景には「高校球児らしさ」が深く関わっており、一人ひとりが役者として高校球児を演じている。球児はオーディエンス（教職員、保護者、地域の人など）に対して印象操作を行い球児としての自分を望ましい姿になるようコントロールしている。

本章では、球児自身がどのような役割が期待されているのかを感じ、その期待に対して球児がどのような行動をとっているのかを聞き取り調査をもとに明らかにしていく。聞き取り調査に協力していただいた選手の基本情報と質問項目は以下の通りである。

表 3-1 選手の基本情報

名前	学年	役職	試合経験
A 選手	3 年	元主将	練習試合、公式戦ともに経験豊富
B 選手	3 年	元副主将	練習試合、公式戦ともに経験豊富
C 選手	2 年	主将	練習試合、公式戦ともに経験豊富
D 選手	2 年	無し	練習試合経験豊富、今秋よりレギュラー
E 選手	1 年	無し	練習試合経験豊富、今秋よりレギュラー
F 選手	1 年	無し	練習試合、公式戦ともに経験不足

筆者作成

表 3-2 聞き取り調査における質問項目

項目	質問内容
1	学校は野球部を応援していると思うか
1-1	学校は野球部にどのような役割を期待していると思うか
1-2	全校応援をしてもらっていることについてどのように思うか
1-3	高校球児にとって部活動と勉強ではどちらが大事か
2	指導者から技術指導と生活指導ではどちらが重視されていたか
2-1	普段、どのような指導を受けるか
2-2	指導者はどのようなことを期待していると思うか
3	地域の方は高校球児に対してどのようなイメージを持っていると思うか
3-1	奉仕活動は大切だと思うか
3-2	野球部らしい行動をとらないといけないと感じるときはあるか
4	親はどのようなことを期待していると思うか
4-1	期待はどのようなところから感じるか
4-2	期待に応えるために頑張っていることは何か
4-3	甲子園に行くことが親への恩返しだと思うか

筆者作成

3-1 学校からの期待

項目 1「学校は野球部を応援していると思うか」について、学校全体と教職員の 2 つの視点からの回答があった。学校全体に関しては、応援してくれていると感じている球児が多かった。その理由として、E 選手は「全道に行ったときもお金を出してもらったり、バスを出してもらったり、お金を結構出してもらっているので期待してくれていると思います」と回答している。筆者が高校生のときにも野球部の予算が他の部活動と比べて桁が違っていたのを現在でも記憶している。それだけの予算を野球部に付け、道具や施設に多額の費用をかけるのには理由があり、私立学校においては顕著に表れている。神村は「やはり（野球部の学校宣伝の）影響力はトップでしょう」（軍司,2008:129）と話している。特に、甲子園に出ることは学校の名前を日本全国に認知してもらう絶好の機会である。一方で、教職員に関しては、先生によってかなりの温度差があることがわかった。応援をしてくれない先生の中には野球部の待遇に不満を持ち、何かにつけて「野球部だから」と言って他生徒には許容範囲でも野球部はしてはいけないということもしばしばある。B 選手は「野球をやっているというだけで一般生徒と少し違うのかなと思います」と感じている。続けて、項目 1-1「学校は野球部にどのような役割を期待していると思うか」について、「生徒の見本になること」（A・B・F 選手）、「(行事やクラス等の) 牽引役になること」（B・C 選手）、「挨拶や礼儀をしっかりとすること」（D・E 選手）との回答を得た。この回答からわかるように野球部を学校の中核として位置付けることで学校を集団として機能しやすくするためであると考えられる。また、高校生という発達段階を考慮して、教員が指導するよりも野球部が先頭に立って模範を示した方が学校運営や学級運営が円滑に進むはずである。A 選手は「野球で教えてもらった礼儀を学校でだらしくしている人を正しい道にもっていくというのも期待していると思います」と感じていることから有効な手段だと考えている。球児は、学校での役割を自覚し、学校生活や行事において大いに活躍している。注記すべきは、調査を行なった学校は進路多様校であり、学力差、家庭環境等において差異が認められることから、学習指導よりも生徒指導の方にウエイトを置かれており、より野球部の役割が明確で重要であることである。北村は「(野球部は) 学校運営の屋台骨なんです」（軍司,2008:158）と表現している。野球部は学校内には模範生徒として、学校外には広告塔として学校のシンボルの役割がある。

3-1-1 全校応援の意義

高校野球の全校応援は、学校行事の一つと言っても良いくらい全校生徒、教職員が盛り上がる瞬間である。しかし、全校応援は授業を変更して行われているものであり、授業を変更してまでも全校応援をする意義は何なのだろうか。

項目 1-2「全校応援をしてもらっていることについてどのように思うか」について、「やってやろう」（C 選手）、「気分が盛り上がる」（D 選手）と回答していることから、全校応援は選手の気持ちを高揚させ、演技者としての要素を強めていることがわかる。その気

持ちを更に高めるものとして吹奏楽部の応援や球場アナウンスが挙げられる。選手自身の名前が球場内に響き渡ることは試合に出場しているという証であり、選手を演技者の中でもスターにする要素の一つである。

それでは、全校応援をやる意義は何なのか質問を続けた。「学校が一つになるとき」(C選手)と回答している。さらに、山野は「野球部が活気づくと校内にもエネルギーがあふれ、…」(軍司,2008:143)、北村も「スタンドで生徒と一緒に応援していますが、スタンドはまるで同窓会です。卒業生もぎょうさん集まって、その盛り上りはすごいですね」と話している。野球は全校生徒を収容するのに十分な広さを持つことから全校応援をすることのできる環境にある。しかし、それ以上に重要な理由がある。学校行事の中で体育祭や合唱祭などあるがこれらは学級対抗で行われるものであり、学校対抗で行われるものは全校応援だけである。全校応援は全校生徒と教職員を一つにし、学校に対する誇りと愛校心を育ませる重要な機会である。北村の「まるで同窓会」という言葉からもわかるように卒業してからもOB、OGが球場に駆けつけ、甲子園に出場した際には、多くの卒業生が寄付金を出すことから学校に対する誇りを持ち続けていることがわかる。全校応援の教育的意義は他の教育活動と同等の価値があると言える。さらに、全校応援は野球部のものだけではなく、吹奏楽部、応援団、チアリーディング部などにおいても日頃の練習の成果を多くの人に発表する貴重な場となっている。

3-1-2 特別な高校野球期間

高校生の本分は学業であるが、進学校を除く多くの学校では、学業よりも部活動が重視されている傾向にある。学校の建前としては学業優先であるが、球児にとっては部活動を優先したいという気持ちが高い。特に、調査した学校のように進路多様校で特待生を毎年数名とっている学校では、その傾向が顕著である。中学生は、高校野球をやるために学校選択を行い、自分の学力などを考慮して進路を決定させてきた球児も多い。

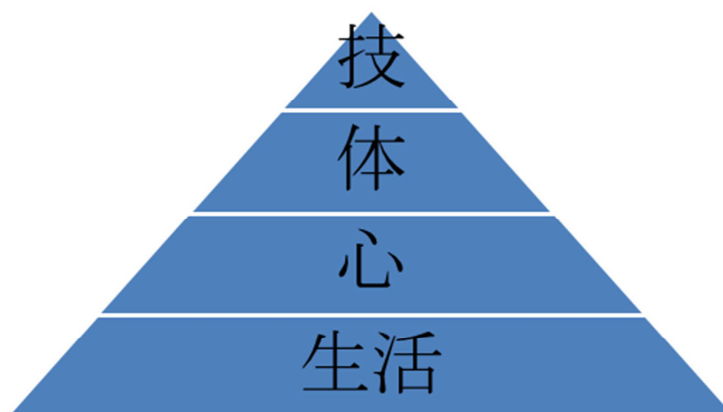
項目 1-3「高校球児にとって部活動と勉強ではどちらが大事か」について、C選手は「高校野球は2年半くらいしかできないけど、勉強はやろうと思えばいつでもできるので野球に打ち込むというのが自分の理想です」と回答している。特に、私立学校では野球のセレクションを受けて大学進学をする球児も多いことから、勉強を犠牲にしても2年4ヵ月間野球の技術を磨くことは進学の道を切り拓くために重要な期間であるという考え方もある。

3-2 指導者からの期待

指導者は、球児と最も多くの時間を共に過ごす人物である。そのため、指導者の指導が球児に与える影響は極めて大きいと言える。高校野球の目的でもある「人間形成」を基礎として多くの指導者が毎日、熱心に指導にあたっている。項目 2「指導者から技術指導と生活指導ではどちらが重視されていたか」について、全ての選手が生活指導と回答した。続けて項目 2-1「普段、どのような指導を受けるか」と質問に対して、「ピラミッドバランス」

(B選手)というキーワードが出てきた。ピラミッドバランスは、調査したチームの部訓であり、心・技・体・生活の習得の過程を表したものである。挨拶や礼儀などの生活をしっかりとすることで心が磨かれ、心が磨かれることで自分に厳しく練習に取り組む姿勢を作り、自分を追い込むことで厳しい練習にも耐える強靱な肉体と体力をつけ、反復練習を行うことで技術が高まるという流れである。

図 3-1 ピラミッドバランス



筆者作成

続けて、項目 2-2「指導者はどのようなことを期待していると思うか」について、全ての選手が野球に関することではなく、人間として、あるいは社会人としての在り方についての回答であった。高校野球の目的が「人間形成」であることを踏まえ、高校野球を通して、「社会に出ても通用する人間」(C選手)を育成することが指導者の使命であり責任である。それを球児も理解しており、球児自身も自分を常に磨き続けているという関係の下に高校野球は成立している。これらの行動はあくまで高校球児という役者を演じているのにすぎず、それが本当の姿ではない。

3-3 地域からの期待

高校野球において”地域”というコミュニティ集団は非常に重要である。項目 3「地域の人々は高校球児に対してどのようなイメージを持っていると思うか」について、「礼儀正しい」(C・D選手)、「夜遅くまで泥だらけになって頑張っている」(E選手)という回答を得た。これらは、高校野球観と一致し、誰もが持っている高校球児像を理解した上で球児も印象操作²を行っている。

地域の意味合いは、都道府県、市町村、居住地周辺のように変化するが、常にその期待を背負いながら球児は試合に臨む。例を挙げれば、甲子園大会において北海道民は北海道

² 要求された印象を維持する上での行為のこと。

代表として出場しているチームの試合だけはテレビで応援しようとする人も多いはずである。特に、駒沢大学附属苫小牧高等学校の夏 3 連覇がかかった試合の視聴率が札幌地区では、NHK が 34.8%（13 時～14 時 7 分）と 43.2%（14 時 9 分～16 時 55 分）、北海道テレビ放送が 16.0%となったことから北海道民の期待度合が伺える。

また、北海道女満別高等学校が春のセンバツ 21 世紀枠に選出され、甲子園に初出場した際にも大空町全体が町をあげての盛り上がりを見せた。へき地の学校になればなるほど地域の期待は高まりを見せ、地域全体が活性化される。このような現象が起こるのも「地域社会のなかに共同体意識あるいは公共性への理解が十分に存在している」（小林・梶井,2011:63）からである。

さらに、調査を行ったチームは、鷹栖町に専用球場を所有しており、そこで休日練習や練習試合を行っているが、そこで球児が周辺住民に「頑張ってね」と直接声をかけられている。その背景として、地元出身の球児が数名在籍していることもあるが、それ以上に野球部が町民に受け入れられ、共同体意識が芽生えているためであると考えられる。また、同校野球部は、新チームとなった夏休みに毎年、津別町に合宿へ訪れる。筆者の時代は 5 泊 6 日という長丁場で行われ、その間、町民の婦人会の方にご好意で朝食、夕食の支度をはじめ様々な面でサポートしていただいた。翌年の夏の大会にも球場まで足を運んでいたことは感謝の気持ちと同時に津別町との繋がりを実感した瞬間であった。

その期待と声援に対する恩返しとして、球児たちは奉仕活動を行う。地域のゴミ拾いを行うチーム、高齢者住宅の雪かきをするチームなど自分たちにできる地域貢献を積極的に行っている。

図 3-2 高齢者住宅の除雪



出所：旭川実業高等学校 HP

3-3-1 高校野球の地域貢献

項目 3-1「奉仕活動は大切だと思うか」について、選手全員が重要性を認識していた。D 選手は、「応援してもらっているので、その分、何らかの形で恩返しをしないといけないので、そういう面でも大事なのかなと思います」と回答した。野球部活動は地域の理解の下に成り立っていることは言うまでもなく、毎日、夜遅くまで球児が声を張り上げ、金属バットの音が響き渡っており、地域住民にしてみれば一種の騒音である。それでも、ほとんど苦情は来ず、「頑張ってね」という声をかけてくれることは、野球に没頭できる環境を地域が創り出してくれていることと繋がり、球児にとっては大変ありがたいことである。一方で違う視点の回答もあった。B 選手は、「ゴミとかを拾うことによって、自分自身としてはやりたくてやるわけではないし、そういうことを自ら進んでやることによって、辛い

ことにも逃げなくなったり、苦しいときにも踏ん張りを効かせてもう一步踏み出せたり、そういう気持ちの部分での成長をする上で奉仕活動は大事だと思います」と回答した。今日、「人間形成」を目的に掲げる高校野球では精神修養をどのように行うかが問われている。一昔前であれば、水を与えなかったり、ケツバットをしたりできたが、現在は体罰の問題が高校野球界にも影響を与えているため、奉仕活動が精神修養の要として登場してきたと考えられる。

3-4 親からの期待

項目 4「親はどのようなことを期待していると思うか」について、A 選手は「思いっきり野球をやってこいってことですかね」と回答した。他にも「人として大切なことを学んでほしい」などの回答を得た。親自身も高校野球が球児に与える影響を十分に理解していることが伺える。続けて、項目 4-1「期待はどのようなところから感じるか」と問い返すと、「ユニフォームを汚しても、綺麗に洗濯してくれて…」(A 選手)、「自分が思いっきり(野球を)できる環境を作ってもらえていた」(B 選手)、「練習試合や公式戦に応援しに来てくれるので」(C・E 選手)、「お金がかかっているのに文句を言わずに(道具を)買ってくれる」(B・C・D・E 選手)、「(朝早く起きて)お弁当を作ってくれる」(E 選手)、「頑張っってねと言われるので」(F 選手)という様々な回答を得ることが出来た。球児は親の期待に敏感であり、最も応えたいと感じる期待である。その期待は必ずしも言葉として伝えられているとは限らず、むしろ言葉ではなく親の行為そのものが球児の期待に応えたいという気持ちが大きくしている。

では、項目 4-2「期待に応えるために頑張っていることは何か」。B 選手は「とにかく、頑張っている姿を見せることです」と回答している。高校野球では負けないチームは決して存在しない。最後の大会でも 1 校を除いて負ける。そのように考えれば、高校野球の価値は、試合に勝つことよりも日々の練習や生活の中にあり、球児もその親も毎日が高校野球をメインとした生活となることから、高校野球とは球児のものだけではなく親の高校野球でもあると考えることができる。

3-4-1 「御恩と奉公」の関係

親は、球児の最高のパフォーマンスを見るために道具を買い、朝早く起きて弁当を作り、ユニフォームを洗濯し、球児はただひたすらに白球を追い続ける。高校野球期間は親子にとって共に歩む特別な 2 年 4 ヶ月となり、ある意味で高校野球をしている親子は”戦友”と言っても過言ではない。親子それぞれが自分の役割を自覚し、まさに「御恩と奉公」の関係が成り立っている。球児にとって親からの期待は高校野球を頑張るための最大エネルギーとなるのである。それでは、球児にとって最高の恩返しは何なのであろうか。甲子園が球児にとっての最大の目標であることを踏まえて、項目 4-3「甲子園に行くことが親への恩返しだと思うか」と質問した。筆者の予想とは反し、全員一致の回答であった。その中でも B

選手の回答が高校野球を終えて客観的に球児だった自分を見つめている。「それは、最大の恩返しだと思います。でも、結果的には行けなかったんですけど自分の中では日頃、監督から言われてきた社会に通用する人物というものが高校に入学した頃よりは、しっかりと自分の中で生きてきて、これからも活かしていければ、そういった形でも恩返しできるのかなと思います」と回答した。「人間形成」という目的が球児と親の共通認識である限り、全ての球児が高校野球を通して親へ恩返しが可能であるといえる。

3-5 小括

球児が学校、部活動、地域、家庭においてどのようなことが期待され、その期待にどのような行動で応えているのかについて見てきた。

学校においては学校内における役割と学校外における役割の 2 つの役割があることがわかった。学校内では他生徒の模範として生活を送り、行事などにおいては先頭に立って学級を牽引していくという役割があり、学校外に対しては学校の名前を売るための広告塔としての役割がある。

指導者からは、野球部活動において「人間形成」を行い、社会に出ても通用する人間になることが期待されている。そのため、生活指導が重視されている傾向にあり、学校は日頃の野球部活動において習得した挨拶や礼儀などを実践する場として活用されていると考えられる。

地域からは、共同体意識の下に応援されていることがわかった。特に、コミュニティ規模が小さくなるほど盛り上がる傾向にある。球児はその期待に応えるために日々の練習を一生懸命に取り組むことは勿論、その他にも奉仕活動に積極的に取り組むことで、地域に貢献しようと考えている。

親からは、球児にとって最も身近な存在であるがゆえに、最も応えたいと感じる期待である。高校野球期間は球児だけではなく親にとっても特別なものであり、それぞれが役割を自覚している。球児は目標である甲子園へ行くことだけが恩返しではなく、普段から一生懸命野球に取り組む姿勢が何よりの恩返しになると考えている。

第4章 高校球児のおしゃれ

マスメディアに発達に伴い、高校野球は見せるスポーツへと変化してきた。さらに時代の流れによって選手たちが使う道具も機能性、デザイン性ともに確実に高くなっている。そんな時代の中で、坊主の強制や眉剃りの禁止が多くの学校で未だに採用されている現状があり、選手たちはその規制の中でおしゃれを楽しんでいる様子が見受けられる。

本章は、私がこの1年間で様々な球児を見てきた経験と母校の野球部に対する聞き取り調査で得られた回答を基に考察していく。質問項目は以下の通りである。

表 4-1 聞き取り調査における質問項目

項目	質問内容
5	坊主は強制されているか
5-1	高校野球は坊主でなければならないと思うか
5-2	長髪のチームにどのような印象を持つか
5-3	坊主にすることで心理面に影響はあるか
5-4	坊主にすることでプレーに影響はあるか
6	眉剃りは禁止されているか
6-1	眉剃りをする理由は何か
6-2	眉剃りを禁止しているチームをどう思うか
6-3	眉剃りをすることで心理面に影響はあるか
6-4	眉剃りをすることでプレーに影響はあるか
7	エルボガードやレッグガードなどは着用していたか
7-1	着用し始めたきっかけは何か
7-2	グラブはオーダーしたか
7-3	野球部で道具を揃えていることについてどう思うか

筆者作成

4-1 坊主

高校野球のイメージとして最初に思い浮かぶのは坊主であろう。しかし、坊主は日本学生野球憲章に記載がないため本来、強制されるものではないが、実態はどうであるか表 4-2 を見ていただきたい。

注目したいのは、1998年度の「③特に取り決めず、長髪も可」である。このアンケートは指導者（監督、責任教師）に対してアンケートを取られたものであり、指導者は直接的に坊主にするように言っているか確かめることはできないが、現実的には先輩からの圧力、チームの暗黙の了解として坊主を強制されている学校も多くあるはずである。筆者の経験からも、高校1年生の選手権大会前には先輩に1年生全員が集められ、五分刈りを強要さ

れた経験もある。筆者が高校1年生のときは2007年度だったため、2008年度調査で約70%の高校で坊主と決められていたことを考えれば自然なことなのかもしれない。しかし、現在よりも年を遡れば遡るほど坊主に対する考え方が柔軟ではない印象を持っているのは多くの人の意見であると考えられる。したがって、このアンケートは野球部員が坊主になっているかどうかは別として、指導者の許容範囲を示しているだけと言えるのではないか。

表 4-2 野球部員の頭髪の実態

質問：野球部員の頭髪の扱いは野球部ではどのように取り決めていますか。

	1998 年度 ＜第 80 回調査結果＞ 回答校：3814 校 加盟校：4158 校 回答率：91.7%		2003 年度 ＜第 85 回調査結果＞ 回答校：4147 校 加盟校：4235 校 回答率：97.9%		2008 年度 ＜第 90 回調査結果＞ 回答校：4050 校 加盟校：4128 校 回答率：98.1%	
	%	校数	%	校数	%	校数
①丸刈り	31.0	1181	46.4	1925	69.2	2801
②スポーツ刈りも可	27.7	1058	22.4	927	15.1	610
③特に決めず、長髪も可	41.1	1566	31.0	1285	15.5	626
非該当	0.2	9	0.2	10	0.3	13

全国高等学校野球大会史より筆者作成

4-1-1 坊主は強制なのか

聞き取り調査の結果からも、項目 5「坊主は強制されていたか」について、「坊主にしてこい」とは直接的に言われてはいないものの、「髪が長いから切ってこい」と言われているようである。髪が伸びているといっても“おしゅれ”ができるような長さではなく、できるとしても“剃り込み”か“ツーブロック”しかないが、それらの髪型は当然認められることもなく、髪を切るとなると坊主しかなくなる。よって、多くの高校球児が指導者から「髪を切ってこい」と言われると、「坊主にしてこい」と解釈する。さらに、チームの状況も大きく左右されるようである。E 選手は、「周りがみんな坊主になっているから」と話していることから、ただ周りに流されているのではなく、一つの集団の構成員として逸脱することは、その集団から排除される可能性を示唆している。

このような現象は多くの学校で起こっていると考えられるが、項目 5-1「高校野球は坊主でなければならないと思うか」について、全選手が肯定した。その中で、B 選手が興味深い回答をしたので引用する。「“高校球児らしさ”というものがあると思っていて、そういっ

た面で挙がるのが坊主っていうイメージなんですけど、野球以外でも何か精進しようと思ったときに他のスポーツでも坊主というものが挙がってくるし、坊主というものがそういった象徴になっているのかなっていうのも少し感じます」と話している。短い高校野球生活の中で自分を成長させるために必死になって野球に取り組む心構えとして坊主は球児にとって大切な要素であると考えられることができる。また、C 選手と話をする中で、甲子園に出場経験のある K 高校について「坊主で気合入れてやっている人からみたら、髪長くて甲子園に出ていたら、なんでこういう人でも出れるんだろうと思います」と話す。筆者も K 高校は記憶にあるが、分かりやすく例えるなら大学野球のような髪型である。この発言からもわかるように、球児自身も高校球児は坊主であるべきであると考えていることがわかる。

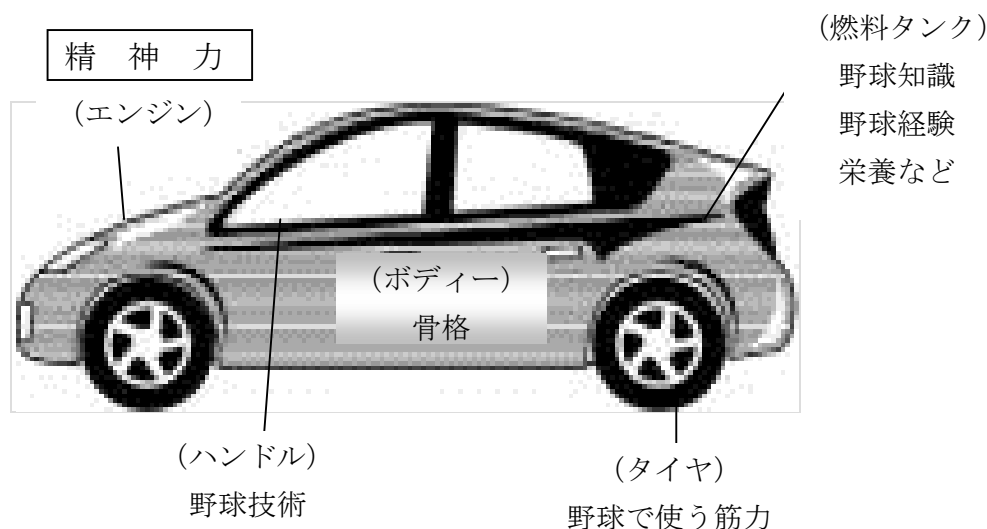
続けて、項目 5-2「長髪のチームにどのような印象を持つか」について質問した。この質問に対しては選手全員がマイナスの印象を持っていることがわかった。「“高校球児らしさ”がない」(B 選手)、「弱い」(B・C・D・E・F 選手)、「上を目指していない」(C 選手)、「真剣に(高校野球を)やっているのか」(E 選手)という回答を得ることができた。高校野球はメディアの存在が非常に大きいことはいまでもなく、特に、幼い頃からテレビで高校野球中継を見て育った球児たちは、甲子園(強いチーム)を見ており、そこでプレーするほぼ全ての球児が坊主であることから、強いチームの条件として考えている。坊主の球児は、強いチームを目指しているのであれば当然、坊主であると考えており、長髪の球児へ上記のような“レッテル”を貼っていると考えられる。

4-1-2 坊主とプレーの関係性

坊主を強制されているチームが多いということは、何かメリットがあつてのことであると考えられる。ここでは、心理面、プレーの 2 側面について考察していく。

項目 5-3「坊主にすることで心理面に影響はあるか」について、「みんな同じ坊主なので、チームワークが出てくると思う」(C 選手)、「気合いが入る」(D・F 選手)と回答している。野球と精神力の関係性について朝西は野球選手の体を自動車の構造に例えて表現した(図 4-1)。「自動車のエンジンに相当するものが、野球選手のもつ精神力であると考え、高性能の自動車であっても、エンジンが回らなければ走行しないように、高い野球技術をもつ野球選手であっても、精神力がなければ野球動作は行えないということである」(朝西,2002:37)と述べている。坊主は精神主義の象徴として挙げられることから間接的にプレーに影響を与えているものと考えられる。

図 4-1 野球選手の体と自動車構造の関係



甲子園に至るまでの心の研究より筆者作成

項目 5-4「坊主にすることでプレーに影響はあるか」については、E 選手が「勝てそうな感じがする」と回答した。これは、項目 5-3 と共通する部分で「気合いが入る」ことで勝利に対する意識が高まったものと考えられる。では、実際はどのようなのであろうか。朝西の調査によると、坊主にすることで高校球児としてのプライド、闘争心、結果を残したいという意識が生じ、それに伴って結果の向上が見られたことがわかった。特に、精神的に追い込まれた場面での結果の向上が顕著に見られた。しかし、結果の向上には限界があり、高い技術を持っている選手においては結果の向上率は低くなる。

4-2 眉剃り

今日、多くの高校生が眉剃りをしている。球児も例外なくその影響を受け、甲子園に出場している多くの球児も眉剃りをしている。その一方で、眉剃りを禁止しているチームも存在している。

項目 6「眉剃りは禁止されているか」について、聞き取り調査を実施したチームでも眉剃りを禁止していることがわかった。しかし、実態として多くの選手が眉剃りをしていることを考えると、厳しく取り決めていないことが伺える。同じ地区のチームでは厳しく眉剃りを禁止しているチームが 2 校存在し、両校共に私立高校である。眉剃りも坊主と同様に強さの象徴なのだろうか。B 選手は「途中までしていたんですけど、高校 3 年生の最後になって絶対に甲子園に行きたいと思ったときに、眉毛を剃ることによって自分としては野球以外の他のことにも意識が向いてしまうというか、そういった些細なことですけど、そ

ういうことに繋がるのが眉剃りであったり、他のこともそうだと思います。その些細なことをしないことによって、より高校野球に自分としては意識を向けられたりだとか、余計なことをしないという意識付けです」と回答している。筆者も高校時代には眉剃りを禁止されており、その理由として B 選手の回答と同様に「野球に意識を向ける」ということを監督に言われていた。そのため、彼女を作ることも禁止され、携帯電話を使うことも良しとはされていなかった。しかし、本気で甲子園を目指したときにそれらのことを犠牲にして野球に没頭できるのは、甲子園が球児にとって神聖なものであるからであろう。

また、項目 6-1「眉剃りをする理由は何か」について、B 選手とは違う視点で E 選手は「坊主なので髪ではおしやれは出来ないの、眉毛でおしやれを楽しんでいます」と回答した。多くの縛りがある中で、眉毛は球児にとって“若者らしさ”を楽しむ要素の一つであると考えられる。また、C 選手は「眉毛を整えることはマナーでもあると思います」と回答した。そこで、筆者は「もし、同じ地区の眉剃りを厳しく禁止しているチームのように、眉剃りを厳しく禁止したらどうするか」という質問を続けた。すると、C 選手は「諦めてします」と回答している。この回答からも高校野球は個人よりも集団としての行動がより強く求められていることがわかる。

項目 6-2「眉剃りを禁止しているチームをどう思うか」について、否定的な意見は聞かれなかった。筆者の主観ではあるが眉剃りを厳しく禁止しているチームは伝統校や古豪といわれるチームに多いと考えられる。そのため、そのようなチームにおいて眉剃りをすることは学校の名前を貶すこと、伝統を壊すことと等しく、さらに OB 会からの圧力も強いいため未だに続けているチームもある。

4-2-1 眉剃りとプレーの関係性

坊主とプレーとの関係性については先述した通りであるが、眉剃りは心理面、プレーに影響はあるのだろうか。項目 6-3「眉剃りをすることで心理面に影響はあるか」について、C 選手を除く 5 名が「ない」と回答した。C 選手は、眉剃りの出来栄が、その日のバロメーターになっているようである。

項目 6-4「眉剃りをすることでプレーに影響はあるか」についても全員が「ない」と回答したことからも眉剃りとプレーに関係性は無いと考えられる。

4-3 高校野球用具

今日、様々な野球道具が開発されプロ野球選手を広告塔として高校野球にまで浸透してきている。しかし、それらは高校野球用具の使用制限において厳しく規制されている。例えば、バッティンググローブの色は黒や白の同一色に限り、商標は 7 cm²以下と定められていることから高校野球が商業的に利用されることを防止すること、主催者の考える「高校球児らしさ」を守るためだと考えられる。

項目 7「エルボガードやレッグガードは着用しているか」について、A・B・C 選手が着

用しており、バッティンググローブは全員が着用していた。特に、エルボガードやレッグガードは選手によって違和感や動きにくさを感じることもあるため着用するか分かれるが、ある傾向が見受けられると考えている。調査したチームにおいても、その傾向は見られたが、試合に多く出ている選手つまりチームの中心選手ほど着用している傾向が強い。さらに強豪校になればなるほど、着用する割合が高くなっている。これらのことから考えるとエルボガードやレッグガードを着用することが強さの象徴や野球技術の高い選手の象徴になっていると考えられる。C選手は「自分が守っていて、相手がレッグ（ガード）、エルボ（ガード）を付けていたら打つんじゃないかなと思うので、（自分も）相手に思わせるために付けています」と回答した。球児は、坊主などの他にも強さを示す要素として、用具を着用することは重要であると考えていることがわかる。

続けて、項目 7-1「着用し始めたきっかけは何か」について、「甲子園でも付けている人が多いので憧れで付け始めました」（C選手）や安全面を考慮して監督から着用するよう勧められたとの回答が得られた。その他にも、「エルボ（ガード）やレッグ（ガード）をファッションとして付けている人はいると思います」（B選手）、先輩に何も付けていなかったら弱そうに見えるとと言われて威圧を与えるために付け始めた選手もいた。着用の経緯は様々でも武装することで“戦う高校球児”へ心身共に進化していこうと考えていることがわかる。

4-3-1 野球用具へのこだわり

球児にとって最もこだわりの野球道具といえばグラブである。高校 2 年生の秋口になるとオーダーグラブの話題で持ち切りになるということは一種の“高校野球あるある”である。多くの球児がオーダーグラブを最後の大会までに最高の型を作り、グラブに味が出るように土の色を馴染ませることに全精力を捧げている。もちろん雨天時にはオーダーグラブを使用することは常識的にありえない。項目 7-2「グラブはオーダーしたか」について、A・B・C・D選手はオーダー済みであったが、E・F選手は 1 年生であることから来年購入する予定だということ。これから購入する E・F選手に「なぜ、オーダーするのか」と質問を続けたところ「刺繍を入れるのが格好いいなと思ったので」と回答した。しかし、オーダーグラブは定価で 60000 円ほどである。簡単に購入できるものではないが、それでも多くの球児が購入するのには理由がありそうである。C選手は「世界に一つのグラブなので、特別な宝物です」、D選手は「一生残るものなので」と回答した。野球を高校で終える選手も少なくないことを考え

図 4-2 オーダーグラブ
(Going My Way と名前の刺繍入り)



筆者撮影・編集

ると、今まで野球を一生懸命に頑張ってきた自分へのご褒美であったり、刺繍に思いを込めて自分を鼓舞していきたいという表れであると考えられる。高校野球が球児にとって特別な存在である限り、グラブに対するこだわりは無くなることは決してないと考えている。

4-3-2 規制の中でのおしゃれ

球児の使用する道具には多くの規制がかけられている。高野連が定める規定は全てのチームが遵守しなければならないが、その他にもチーム内での規制も多く存在する。ここでは、許容範囲の中で球児が楽しんでいる”おしゃれ”を紹介していくが、高校野球を経験していない人から見ると同じようにしか見えない細かい”おしゃれ”も存在し興味深いものである。道具で”おしゃれ”をする意味合いは、集団意識の中でも自己主張する要素であることである。頭の先から手の先、そして足の先まで球児は様々な道具や着方にこだわりを見せられるのは、高校野球の楽しみの一つと言ってもよい。

(1) 帽子

帽子のツバを曲げる行為は少年野球から大学野球まで多くの野球選手が行っている。程度としてはプレーするレベルが上がるに連れて原型に近い形になっていき、小学生の中にはツバが折れてしまっている選手も見かけるが、高校生になると自分のこだわりの型があり、その型に曲げる選手もいる一方で、ツバ曲げが禁止されているチームもある。しかし、ツバ曲げが禁止されているチームにも”おしゃれ”があり、市内の J 高校では買った状態の帽子の型で浅くかぶることを”おしゃれ”と感じている。

現在、帽子には大きく 2 種類あり、丸型と六方型（八方型）に分かれる。近年、丸型は大学野球をはじめとして高校野球においても採用するチームが増えてきている。一方、六方型は高校野球で採用しているチームが依然として多く、六方型をかぶる球児は前面部を立て、前頭部を凹ます型が主流である（図 4-3）。六方型帽子の作り方としては、前面部に洗濯バサミを付け、使用するとき以外は常に洗濯バサミで挟んだ状態にしている。筆者が球児だった頃、ある私立高校の野球部専用バスを見ると洗濯バサミを付けた帽子をかぶった球児が乗っており、異様な光景であった。

図 4-3 六方型帽子



筆者撮影

(2) アンダーシャツ

野球のユニフォームといえは数あるスポーツの中でも厚着であり、炎天下の中で練習や試合が行われる。普通であれば、なるべく薄着をして体温調節をするはずであるが、高校野球では逆の行為をする選手が多い。球児の多くはパワーシャツやタートルネックのアンダーシャツを着用する選手が多い。首周りを覆うことで体を温める効果があることは常識

であるが、それをあえて炎天下の中で行う意味は何なのか。選手によっては、パワーシャツとノースリーブのタートルネックを重ね着する選手も多く、筆者もその一人であったが、試合では暑くても格好良くキメたいという心理だったように思う。学校でも Y シャツの中にパワーシャツを着たり、体育の指定 T シャツとノースリーブのタートルネックを重ね着していた。野球は重ね着をするユニフォームであることから、球児にとっては重ね着をして”おしゅれ”を楽しむことは当然のことであると考えられる。

(3) ストッキング

野球経験のない人がストッキングと聞いてもすぐに頭に浮かぶ人は少ないと考えられる。ストッキングとは、ソックスの上に履く、色やラインの入ったソックスのようなものである。そう聞いてどのようなものを思い浮かべるだろうか。おそらくは、ハイカットストッキングと呼ばれる足首の辺りの前方と後方にソックスが半楕円形で見えるものを想像しているのではないか。しかし、現在の主流は、ソックスがほとんど見えないローカットストッキングと足の甲までカバーするサポートストッキングである。傍から見れば、どれも変わらないように見えるが、球児は細かいところにもこだわることで満足感を得る。

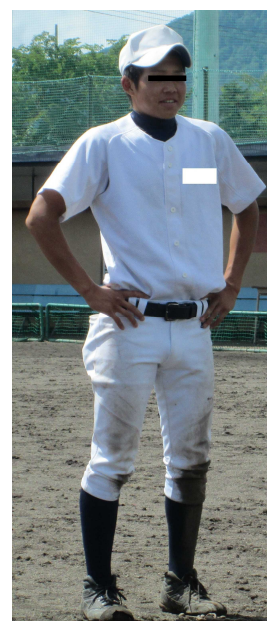
4-4 高校野球の美意識

高校野球では、美意識が存在していると感じることが多々ある。高校野球は“ひまわり畑”に例えられように、球児（ひまわり）が、甲子園（太陽）に向かって懸命に努力（成長）している美しいものであると考える人もいる。また、筆者が球児だったときに流行した携帯電話の待ち受け画面がある。これも、高校野球を華に例えたものであるが、「野球という名の種をまき、努力という名の肥をやり、汗という名の水をやれば、勝利という名の華が咲く」という言葉であった。華は基本的に美しいものの象徴であり、それに高校野球を当てはめて表現されるというのは、高校野球が美しいものであると考えてよい。

また、野球のユニフォームを想像したとき、多くの方が「白」と答える。考えてみると、野球は土の上で行うスポーツであり、ユニフォームが汚れることを考えると、「黒」などの汚れが目立たない色にした方が洗濯の手間が省け、理に適っている。しかし、ユニフォームを汚すことは努力の証であり、一日の練習に充足感を得る要素である。

さらに、「白」には、球児の純白な心、清潔感、素直な心などを表していると考えられることから、「高校球児らしさ」を形成する上で白いユニフォームを身にまとうことは非常に重要である。

図 4-4 高校球児



筆者撮影・編集

4-4-1 統一性の美

高校野球といえば、部員全員がお揃いのバッグ、ジャージ、グラウンドコートなど様々あるが、ひと目見ただけで〇〇高校の野球部だとわかるくらいの知名度を持っている。有名な高校になると制服よりも野球部の格好の方がメジャーな高校もあると考えられる。

項目 7-3「野球部で道具を揃えていることについてどう思うか」について、「揃っていた方が強そうに見えます」といいます（A 選手）、「揃っていたらチームの統一感が出て雑然としたものよりかは綺麗に整っていた方がピシッとなります」（B 選手）、「高校野球っていう感じですね」（C 選手）「揃っていないとダサいなというイメージがあります。弱そうだなと思います」（D 選手）、「揃っていたら凄く格好いいです。揃っていないと弱そうに見えます」（F 選手）という回答を得ることが出来た。高校野球は集団として機能しており、その集団にどのように帰属するのが重要である。その意味でも、まず身だしなみから整えることは、気持ちの統一感を出すより容易に実行できることから高校野球にとって大きなウエイトを占めている。多くのチームが実施していることを考えれば有効な手段と考えられる。また、統一感のあるチームは道具だけではなく、返事や挨拶、道具の並べ方などにも統一感がある。これらは強さの象徴ともなり、多くのチームで厳しく指導されている。

特に、挨拶は非常に重要な要素で多くの球児が高校野球から学んだものは挨拶と回答する。多くの球児が目上の人やお客さんに挨拶をし、グラウンドに出入りするとき、キャッチボール前後、試合前後、試合後の相手指導者や観客への挨拶、ミーティング後や帰る前に先輩、指導者へ一人ひとりへの挨拶をしていた。特に、野球部員全員が息を揃えて挨拶をしたときの迫力は凄まじいものがある。朝西によって「声をそろえることにより、チームの士気が高まることが確認された」（朝西,2002:53）ことから心理学的にも挨拶や返事は重要であることがわかる。

4-4-2 負け方の美

高校野球は負けたら終わりという非常にシビアな世界である。誰もが負けを経験するが、特に最後の大会で負けたときには、多くの球児が涙を流す。当然、負けた悔しさもあるが、それ以上に高校野球を失った喪失感が球児を襲う。甲子園は球児の憧れの舞台であり目標でもあるが、本来高校野球の聖地は、それぞれのグラウンドあるはずである。喧嘩したり、怒られたり、励まし合ったりと多くの思い出が詰まったグラウンドでチームメイトと一緒に高校野球をできないという表現しがたい感情が込み上げてくるのだ。小林は「夏の大会で負けた瞬間、まるで捨て猫のように、高校野球から突然放りだされた、一生そこには戻れない、激しい喪失感にさいなまれた。（一体、今日から何をして生きていけばいいのか…）」（小林,2007:135）と表現している。

涙を流すことが美德とするかについては賛否両論あるが、決して球児は観衆の同情を引こうとしているわけでも、絵面を気にしているわけではない。ただ純粋な気持ちで様々な感情が入り混ざり自然と涙が流れてくるのだ。これが多くの人を共感させる要素ではない

かと考えている。利害関係ではなく、ただ少しでも長く高校野球をしたいという気持ちを胸に懸命に白球を追いかける姿は観客の視線を球場内に釘付けにする。試合後に行われる挨拶のときに勝敗に関わらず両校に大きな拍手が沸き起こることからも理解できるだろう。その後、泣き崩れる球児や監督に支えられながらベンチに戻る球児の姿はよく見かける。

しかし、高校野球の本当の美しさは裏舞台にある。試合後に控え室へ集まりラストミーティングを行うのだが、高校 3 年生部員にとっては“高校野球の卒業式”である。そこで球児は現実世界に戻り、改めて高校野球の終了を実感する。指導者も目に涙を溜めながら一言ひと言、言葉を選んで話す。内容としては、今日に至る過程の振り返り、球児への感謝の言葉、「高校野球が終わってから本当の勝負だ」などの将来への^{はなむけ}餞の言葉、親へ感謝の気持ちを伝えることなどである。ラストミーティングが終わったときに高校野球を 3 年間続けてきて良かったと最も強く感じる瞬間である。

4-5 小括

本章では、球児が高野連やチーム内での多くの規制がある中でも、“おしゃれ”や道具へのこだわりがあることを明らかにした。

坊主や眉剃りに関しては、個人よりも集団として判断する傾向が強く、そこから逸脱することは集団秩序を乱す行為として集団から排除される可能性を示唆している。一方で道具に関しては、個人の裁量が大きいことから選手によってこだわりが見られる。特に、グラブに刺繍を入れることへの憧れやエルボガードなどの着用、ユニフォームの着方など細かい部分でのこだわりも見られた。それらは甲子園やプロ野球の影響が大きく、メディアによって創り出された文化と言ってよい。一方で、これらの“おしゃれ”は、強い集団意識の中でも自分の存在を主張する非常に重要な要素である。

高校野球の美意識について、高校野球はしばしば逞しく成長する花に例えて表現される。何度踏まれても立ち上がって美しい華を咲かせるように、何度負けても、挫けても努力し続ける反骨心が類似している。そんな 1 日 1 日を真剣に自分やチームメイトと向き合ってきた球児だからこそ、最後に負けたときには高校野球と引き換えに大切なものを手にすることができるのである。

第5章 まとめ

5-1 総括

本論文は、球児に焦点を当て、様々な視点から「高校球児らしさ」について考察してきた。「高校球児らしさ」がどのようにして形成されたのか、また、「高校球児らしい」行動や身なりにはどのような意味があるのか明らかにしてきた。

そもそも、「高校球児らしさ」が形成されるには、高校野球がなぜ国民に受け入れられたのかを考える必要がある。筆者は、世界から見る「日本人らしさ」と国民から見る「高校球児らしさ」が類似していること、つまり「高校球児らしさ」というのは「日本人らしさ」の象徴であると考えられてきたからではないかと考えている。これが、高校野球というスポーツが国民に受け入れられ、今なお人気は衰えぬまま続けられている大きな要素であると考えられる。長い間、国民に受け入れられてきたからこそ「高校球児らしさ」は誕生し、定着したと言える。それは、高野連や朝日新聞社によって恣意的に創り上げられたものであったとしても、国民によって美化されることで、球児は理想の若者像として認識され、その反面で球児の自由や個性が制限されるという重大な失態を起こした。その反動が逸脱行為、すなわち不祥事と関係している可能性は否定できない。

しかし、球児個人の自由や個性が制限されながらも、ここまで秩序が保たれているのには集団への帰属意識の高さが非常に強く関わっていることがわかった。球児というよりも野球部という集団の構成員としての行動を何より重視され、そこから逸脱することがどのような意味を持つのかを十分に理解しているからである。そのような規制の中でも自分らしさを主張するために道具へのこだわりやおしゃれを楽しむ様子も見られた。

このように考えると、球児としての在り方や行動は昔から受け継がれてきた伝統的な「高校球児らしさ」と言え、不変のものであるのに対して、球児の容姿や道具へのこだわりはその時代の若者らしさを創り出す現代的な「高校球児らしさ」と言え、時代の変化とともに変わり続けるものであると考えている。しかし、世間から求められたり、一般的に考えられている「高校球児らしさ」は前者の方である。

これについては第3章で論じたが、「高校球児らしさ」が一種のラベリング的要素を持っているといえる。球児は、社会からの一方的な高校野球観によって高校球児というレッテルを貼られることで「高校球児らしい」行動が求められている。高校野球をハワード S.ベッカーのラベリング理論³に当てはめると、「社会集団は、球児であれば行おうであろう行動、あるいは行わないであろう行動を高校野球観として持っており、それを球児に適用し、彼らに「高校球児らしさ」というレッテルを貼ることによって、社会からの厳しい目を意識させ（第一次逸脱）、「高校球児らしい」行動が生みだされる（第二次逸脱＝スティグマ化）。」（ゴッフマン,2001:254）ということになる。一例を挙げれば、社会集団は球児に対し

³ 逸脱というものは、行為者の内的な属性ではなく、周囲からのラベリング（レッテル貼り）によって生みだされるものだ、という概念。

て、“高校球児であれば坊主にしているはずである”という考えを持ち、無意識のうちに球児に坊主という「高校球児らしさ」を求めており、それを理解した上で球児も坊主という行動を選択するのである。そのように考えると、「高校球児らしさ」とは、球児の行為の性質ではなく社会によって創られた「高校球児らしさ」が球児に適用された結果である。

さらに、4-1-1において、坊主の集団意識について触れたが、佐藤は青年期のアイデンティティについて「確固とした所属集団を持たない青年にとって、他の多くの青年たちがそのスタイルを採用している社会タイプのスタイルをみずからも採用することは、(ゆるやかな紐帯で結ばれた) 一種の共同体への所属・帰属感与えてくれる。このようにして、彼は、社会タイプのスタイルを藉りることによって、青年期の生活を一定の筋書きに沿ってみずから編集・演出し、その中に、ある種の秩序と意味を見出していくことができるのである」(佐藤,1999:222) と述べている。自らが野球部を辞めようと考えればいつでも退部することは可能であるが、高校野球あるいは「高校球児らしさ」という固定化されたモデルがあり、球児全員が「高校球児らしさ」を演じることで野球部員であるという自己認識をすることが、集団への秩序を生み出していると解することができる。青年期という大人でも子どもでもない期間であるからこそ、「高校球児らしさ」をここまで深く浸透させることができたのである。これまで、ラベリングは否定的な意味として使われてきた。しかし、「高校球児らしさ」に適用することで肯定的な意味としてもラベリング理論を用いることも可能であることがわかった。

それでは、これまで本論文で述べてきた「高校球児らしさ」はどのようなもののことを指すのだろうか。本論文を横断的に考察することで、ある結論を導き出すことができた。筆者は、「高校球児らしさ」とは、『武士道精神を尊び、集団の中で一定の秩序に従って行動する、崇高な倫理観を兼ね備えた(あるいは、求められる) 高校球児としての振る舞い』のことであると結論づけた。

そのように考えると「高校球児らしさ」は、一つの文化と捉えることもできる。ハワード S. ベッカーは、「文化とは型 (type) であり、同一の身振りや物事がその社会のさまざまな成員に対してもつ意味は、この文化という型に同調する傾向がある。… (中略) … 社会の成員間に因襲化されている行動が全成員にとって同一であるかぎり、われわれはそれを「文化」と認定することが可能となる」(ハワード S. ベッカー,1994:116) ということからも、「高校球児らしい」行為は社会の中で受け入れられ、一定の評価を得ている。それは、社会が「高校球児らしさ」へ同調しているといえるため、「高校球児らしさ」は文化と捉えることも可能なのである。

おわりに

高校野球は、もうすぐ 1 世紀という節目を迎える。それを機に大きく改革をしていくべきであると考えている。球児に対して「高校球児らしさ」を求めることは決して悪いことではない。しかし、過度に干渉することは、逆に「高校球児らしさ」を損なう原因ともなりかねない。その時代に応じた「高校球児らしさ」を見つけ、その良さを伸ばしていくことが高野連や朝日新聞社の担うべき役割ではないか。

しかし、問題は山積みであり、その一つが特待生問題である。ここでは、本論文の趣旨から逸れてしまうため割愛するが、興味がある方は、『高校野球の「裏」ビジネス』を是非とも読んでいただきたい。第 6・7 章に特待生問題の経緯、高野連の対応など記述され、第 8 章「特待 5 人でどうなるのか」に筆者も懸念している特待生問題の課題が述べられている。付け加えると、今日、公立高校でも推薦入学によって多くの野球部員を獲得している。ここ数年での地区大会の勢力図が変化してしまったのも特待生問題の影響は否定できない。

このように、変化を続ける高校野球に対応するべく、高野連は現場や社会の声を真摯に受け止める姿勢が大切であろう。そのために、第 3 者機関の設置し、現場の指導者へのヒアリングなどを行い、現状や課題を高野連と現場の双方が把握することで、より良い高校野球運営が実現できると考えている。

また、これからは、多くの高校野球ファンに高校野球の有用性や必要性を示していかななくてはならない。球児を主催者の操り人形としてではなく、未来の担い手として尊重し、高校野球は、その素地を養う場であるという認識を再確認し、一層、魅力ある高校野球となることを願っている。

謝辞

本論文を作成するにあたり、調査にご協力頂いた旭川明成高等学校野球部の皆さん、指導者の方々に深く御礼申し上げます。また、角一典准教授には、大変多忙の中、論文指導をして頂いたことに心より感謝致します。

尚、本論文は私的見解が含まれており、解釈の違いから本来の意味とは異なる表現箇所があることと思いますがご了承頂ければと考えております。

本論文が無事に完成できたのは多くの方々のお力添えのお陰です。ありがとうございました。

参考文献

- ・ アーヴィング・ゴッフマン／石黒毅訳, 2001, 『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』 せりか書房
- ・ 朝西知徳, 2002, 『甲子園に至るまでの心の研究』 新風舎
- ・ 朝日新聞社・日本高等学校野球連盟, 2009, 『全国高等学校野球選手権大会史（第 81～90 回）』 朝日新聞社
- ・ 内川芳美、松島栄一監修, 1986, 『明治ニュース事典第八巻 明治 41 年—明治 45 年』 毎日コミュニケーションズ
- ・ 江刺正吾・小倉博, 1994, 『高校野球の社会学 甲子園を読む』 世界思想社
- ・ 金子国彦, 2000, 『野球と市民』 北海道新聞社
- ・ 金菱清, 2010, 『体感する社会学 Oh! My Sociology』 新曜社
- ・ 軍司貞則, 2008, 『高校野球「裏」ビジネス』 ちくま新書
- ・ 小林信也, 2007, 『高校野球が危ない!』 草思社
- ・ 小林好宏・梶井祥子, 2011, 『これからの選択 ソーシャル・キャピタル 地域に住むプライド』（財）北海道開発協会
- ・ 佐藤郁哉, 1999, 『暴走族のエスノグラフィー モードの叛乱と文化の呪縛』 新曜社
- ・ 清水諭, 1998, 『甲子園野球のアルケオロジ— スポーツの「物語」・メディア・身体文化』 新評社
- ・ 橋戸頑鉄, 1905, 『最近野球術』 博文館
- ・ ハワード S.ベッカー／村上直之訳, 1994, 『アウトサイダーズ ラベリング理論とはなにか』 新泉社

参照ホームページ

- ・ 第一高等学校 HP
<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/ICHIKOH/index.html>
- ・ 公益財団法人日本高等学校野球連盟 HP
<http://www.jhbf.or.jp/>
- ・ 公益財団法人全国高等学校体育連盟 HP
<http://www.zen-koutairen.com/>
- ・ 朝日新聞デジタル
<http://www.asahi.com/koshien/95/news/TKY201306130327.html>
- ・ 旭川実業高等学校 HP
<http://www.asahikawa-jitsugyo.ed.jp/>
- ・ 共同通信社

- <http://www.kyodo.co.jp/photo-news/>
- 秋田県野球フォーラム
http://blog.livedoor.jp/jstaff1235/archives/cat_10050356.html
 - 球ちゃんの北北海道の高校野球応援ブログ
<http://plaza.rakuten.co.jp/kitahokkado2/diary/200709220000/>
 - 高校野球ドットコム
<http://www.hb-nippon.com/>
 - 『日本の学生野球の今昔』
http://www.gakushuin.ac.jp/univ/eco/gakkai/pdf_files/keizai_ronsyuu/contents/4101/4101wakimura.htm